特63
843

國山經略

昭和
44. 3. 24
内交

袖珍文庫發刊の主旨

明治の文明は漸く膚淺の境を脱せんとして居る。米を食ひ肉を食へば生きて居られると云陋劣な時代は去つて、書を以て靈を養はねば生きて居れぬと云向上の時代に入つた。明治の文明が眞に輝くのはこれからである。

現下の讀書界は一方に泰西の奔放なる新思想を味ふと共に一方に自國の過去に於ける、産物を新しき眼を以て親ひつゝある。この後者の要求に應じてこゝ數年來盛んに古書の飜刻が起つた。祝すべくはあるが、その飜刻書はいづれも大冊で裝釘も立派であろ爲に高價であり、且つ大抵は豫約出版法を取るが爲に購讀が手輕く出來ぬのが缺陷である。

泰西にはカッセル、レグラム等云書肆があつて、どんな名著でも極めて簡素な小冊子にして極めて廉價に販賣する。屋根裏に住む貧書生でも自由にこれを

購讀し、紳士も携帶に便なるを喜んで旅行でもする際は必ずこれを袖にする。

弊院が袖珍文庫を發刊するのは日本のカッセルとして立つたのである。古典と云はず輕文學といはず、雅といはず俗といはず、韻文といはず散文といはず過去の日本が產出したる文藝作物の一切はもとより、必ずしも本邦を範圍とせず漢籍中必讀のものをも選み、必ずしも文藝を範圍とせず經世修養其他の書をも選み、いづれも二十五錢均一の袖珍本に裝釘して、弘く讀書界に提供し、以て現下の缺陷を補はむとするのである。その假名漢字の鹽梅等に留意して現代の讀者諸彦に便した事、校訂を最嚴密にした事などはこの文庫の特色と自信する。

明治四十三年六月

三敎書院主識

解題

常山紀談は岡山の藩士常山湯淺元禎の著である。上杉、織田、德川、其他大小侯伯や其臣等に關する雜談を斷片的に列陳した書である。文極めて簡潔であるが、非常に韻きが强くて、印象が明晰である。當代の武家言葉が其儘用ひてあるのも其の因であらう。描き出す範圍が狹いけれども、描く所微に入る、例へば本能寺の變の段の如き、信長の姿、侍女の衣の色、信長室內に隱るゝ時障子に灯さして信長の影法師見えたるなど、讀む者をして目前に其光景を見る思ひあらしめる。家康のことになると、おそろしく敬語を使つてるのは甚だ厭味であるが、時勢の影響で仕方が無い。

常山紀談

序

常山紀談者。備前湯君之祥。紀戰國將士武功也。權謀形勢備矣。於馳驅周旋。蓋獨詳焉。世之君子。動謂兵。顧將略何如耳。馳驅周旋。匹夫之勇。非所尚也。此不稽古者也。不通今者也。三代之世。寓兵于農。卿出爲將。士善射御。先士卒勇敢有力。養之禮義。用之戰爭。士卒亦以武自喜。左氏具載焉。春秋之時。師徒撓敗。至泯社稷。而死者不過三千百。則先王之遺也。秦漢以來。文武

異官。大將不手兵。兵發於卒伍。雖數立軍功。擢至將萬人。而黥面刺臂。目不識字。士大夫視以爲奴隸。人人不自重。惟以賞罰。威之耳。時將亦制陳法。明懸令以一切立功。終不能使士卒自喜焉。後世之戰。僵尸百萬。功唯數大將。而裨將以下。一傳名者。兵制異也。故謂先王之世。不尚馳驅周旋者。不稽古也。昔者皇朝。軍團取法隋唐。第異邦俊民。皆從事科擧。椎魯亡識者。乃爲兵。我邦則公卿世官。州郡之民不擧朝廷。豪傑之士不在南畝。則爲兵。東夷數叛。源氏世將。恩義下結。武人漸貴。保平之後。皇綱解紐。自鎌

倉至室町氏。日尋干戈。時將皆賴士卒之勇。以決勝。人自爲戰。未暇遑講兵法也。至甲越二公。稍有節制。而士愈益自喜。以接勝國。名垂竹帛者。數百人。神祖初起。尤名得士。一統宇內。封建諸侯。諸侯亦各建將帥。爲卿大夫。世其祿位。寛永以後。有兵家者流。潤色甲越遺言。以敎人。擧世宗之。其人守一家所傳。不用心於將士之談話。戰國之事往往失實。或又謂戰國時。多慶軍立功者。故諸將不吝爵祿。以畜士。太平已久。世無喋血。有如萬一邊圉有警。則莫如遵異邦之法。明法令。嚴賞罰。以率之。近世將士之談。無所

用也。殊不知。異邦之兵皆卒徒。故唯可以法使也。我邦士大夫。皆出自武騎。國家待士。養其廉恥。使人人自喜。平生待以君子。則臨事不可徒以法令約束之也。故謂馳驅周旋。非當世所尚者。不通今也。士大夫。不聞將士之談。則無以自勵人君。不聞將士之談。則無以作士氣。在今兵法之要。莫先於近古將士之談。今列國士大夫。莫不學兵法習武藝。而不用心於將士之談。敎者之過也。世多野史。志戰國之事。眞僞雜糅。言無統紀。獨湯君。折衷百家。撮其雋永。以垂不朽。國初以來。未之有也。其書務崇節義。雖小必錄。末又概載國朝太平君臣言行之美。以翼名敎。蓋其善志也。君世仕西藩。落落寡合。弗爲名計。世尠知君者。爲人博學篤行。器識高邁。當世未見其倫。此書也行。人其庶幾窺豹一斑矣乎。常山備之望也。君居有常山樓。

明和丁亥九月甲子　　龜山　松崎　惟時撰

予嘗慨往事之棼々。若滅若亡。傳於今者。何寥々哉。蓋載籍未備。世遠磨滅也。夫前言往行者。得失之林。君子可以觀世矣。載籍散泆。不獨吾邦爲然而已也。倚相之丘索。惠子之五車。向歆孟堅之所錄。逞々乎零墜。而況吾邦乎。於乎。室町氏以前亡論已。及群雄虓闘。並爲戰國。網漏呑舟之魚。疆場多壘。采山養海。塞井夷竈。狺々乎沐猴哉。豐王以竊金。黔首攘臂乎草野。奮其威詐。雷震霆擊。鞭笞海內。三韓草靡。安知非炕龍絶氣。紫色擺聲。聖王之驅除乎。宜哉不祀忽緒。其間仁人義士。齎志呑憤。以沒世者。卓行懿範。湮盡罔聞。

豈不悲邪。迨吾神祖。聰明神武。革命創制。解民倒懸。列朝重熙。百年謐。如或遇大史氏采簡。錄謀臣經國之略。武夫野戰之功。則何以哉。湮盡罔聞。豈不惜乎。予適每有勝國以來遺逸事。得諸傚篋斷簡。聞長老黃髮所謂記。廼削牘識之。往事之焚々。庶幾存十一於千百。匪有意於備不朽。竢大史氏之所索也。近者取而閱之。其所識。多國俗猟獷所憙。技擊相高。賈勇搏人之談。犬鷹之事哉。其人骨已朽矣。庸何足傳乎後世。予於是乎。重慨之。烏乎。保平之間。源平迭興。上義媮死。尚信伏節。習以成性。孰與元天之際。士無常君。

國亡ニ定臣。朝委レ質。而夕倒レ戈。戎首者上乎哉。風俗之道。士爲レ政。前言往行。得失之林。君子可ニ以觀レ世矣。是爲レ序。

元文四年巳未五月九日　湯元禎

凡例

一　凡そ此書、天文永祿の比より、泰平に及ぶまでの事實を集め記せり。戰國の時勢、國初の風俗、武人の言行、是れ皆世を觀る人の尤も識るべき所にして、是れ輯錄の本意なり。明君、賢佐、亂臣、奸賊の勸懲に具ふべき、自ら其中に見ゆれば、必ずしも評論を記さず。

一　吾が國の士風、源平の世と戰國の世と異同なきに非ず。凡そ古の風信を尙び、義を尊び、節操を重んじける事ども、古き物語に見えたり。戰國の士多くは利名を貪るにあり。今川氏眞の沒落、北條氏政の滅亡の時、死に殉ひたる人尠し。されば節義の士の姓名、散逸せん事歎かしく、努めて殉難忠臣の姓名を記せるも、又此書の本意なり。

一　戰國の間、記載詳ならず、相傳ふる所、誤れる事少からず。一事にて異說

多きあり、同異孰れか是を知らざるは、其說々をも悉く記せり。人の姓名及び年月の審かならざるも、只記し傳へ、語り傳ふるまゝに記せるは、比校すべき典籍のなければなり。

一 戰國の武者詞一種あり。物わかれ、くひとめられたると云ふが如き是れなり。皆其傳へたるまゝに記せり。又言ひ傳ふる世の詞も、其傳ふるまゝに記せり。文字を飾飾せざる事は、其世代によりて、記錄の實不實、分明なるが故なり。左傳は其世の實錄にて、公穀の二書は、後の世に記せると云ふも、其詞によりて分るゝ處なればなり。然れども、大に謬れるに至りては、改め記せるもあり。世の人甲をかぶと、冑をよろひと訓むが如きは、皆改め記せり。

一 賞譽すべき事にも非ざるを記せるあり。是れは唯其世の有樣を、想ひ見つべきが爲なり。昔賞譽したりと覺しき事にも、心得難き事あり。天正年中、

肥後の有動を、秀吉柳川にて殺されし時、立花宗茂有動が、臣の佯して來れる新田善良が剛の者なりとて、惜しみて告げ知らせられしに、善良其事を、有動に隱して告げ知らせず。運を開くべき道なきを知りたればとて、我が主君の明日禍に罹るべき事を告げざるを、如何にして其時は褒めたりしにや。此れは非義の義なるべし。されば斯かる類は此書に記さず。

常山紀談第一編目次

卷之一

長尾輝虎越後を治められし事……一
輝虎平家を語らせて聞かれし事
附佐野天德寺の事……五
參河國伊田合戰の事……七
近江國音羽城軍の事……一〇
荒木安藝守討死の事……一一
甲斐國韮崎合戰の事……一四
寛平三郎功名の事……一五
佐伯惟常高崎城を乘り取る事……一七
北條早雲智計の事……一八
毛利元就嚴島合戰附盲人間者の事……一八
元就伊豫の河野に船を借られし事……二二
那須の臣大關夕安深慮の事……二三
太田持資歌道に志す事……二四
持資京に上りし時の事
附かゝる時の歌の沙汰……二六

木全知矩連歌の事……二八
輝虎私市城を攻められし事……二九
輝虎太田三樂が子を質に取られし事……三〇

卷之二

東照宮大高城へ兵粮を入れ給ひし事……三三
大久保忠俊の事……三五
桶狭間合戰今川義元討死の事…三六
信長上京の事……三八
東照宮大高城を引き取り給ふ事……三九
武田信玄忍びの者を討たれし事……四〇
信玄鹿島傳右衛門を呼ばれし事……四一
備前國龍口落城の事 附浮田直家の事並に岡剛助高名……四二
遠藤喜三郎三村家親を打つ事並に備前明禪寺合戰の事……五五
上杉謙信小田原へ攻め入られし事 附上京の事……六七
新發田治長の事……六九

信濃國川中島合戰の事……七〇
謙信軍中に青竹を持たれし事…七六
謙信松山城後卷の事……七七
東照宮一向宗の黨と厚木坂にて御軍ありし事 附蜂谷牛之丞が事……七九
東照宮針崎合戰の事……八一
向井與左衛門かへり感狀の事…八二

卷之三

中島元行が母備中經山城を守る事……八五
石川數正淺岡某に鞦の緒の結び樣を習ふ事……八六
東照宮三河國一宮城御後卷の事……八八
三好松永光源院義輝朝臣を弑する事……九〇
三好實休戰死の事 附光忠の刀の事……九二
浦兵部功名の事……九七
中村新兵衛永原安藝守一騎打の事……九七
北條綱成地黃八幡の旗を捨つる事……九八

柴田勝家水甕を破りて城を守りし事……九九
勝家先陣の將となる事……一〇一
坪内某料理の事……一〇二
大澤左衛門が手の者ども東照宮を窺ひ奉りし事……一〇三
清洲にて東照宮信長公御對面の事……一〇五
信長公伊勢の國司を亡し給ひし事……一〇六
大久保忠隣功名の事……一〇八
高木主水村越與三右衛門後殿の事……一〇九
太田下野識鑒の事……一一一
北條丹後指物の事……一一一
淺井長政齋藤龍興と軍の事……一一二
丸毛兵庫助軍配の事……一一三
馬場美濃守今川の館を燒く事……一一四
大友義鎮肥前國退口の事……一一四
信長公東照宮に僞朝の鏃を進らせられし事……一一五
姉川合戰の事……一一六
姉川合戰榊原二の手功名の事……一一七
三井角右衛門生瀨平右衛門功名穿鑿の事……一一七
金松彌五左衛門物見の事……一一九
信長公朝倉を擊ち給ひし事……一二〇
長野信濃守上野國箕輪城を守る事……一二一
箕形原合戰の事……一二二
箕形原合戰信玄遠謀の事……一三〇
箕形原合戰東照宮御退口の事……一三一

卷之四

山崎長門守託美越前守討死の事……一三五
中川重秀和田惟政を擊つ事……一三六
梶川彌三郎根島先陣の事……一三七
山内一豐馬を買はれし事……一三八
奥平貞能父子歸降の事……一四〇
東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事……一四三
渡邊守綱を槍半藏といふ事……一四四
謙信單騎佐野城に入られし事……一四五
大河内政房節義の事……一四六
鳥居强右衛門忠節の事……一四八
酒井忠次鴉巢城を乘り取られし事……一五一

長篠合戰の事……一五二
内藤四郎左衛門返答の事……一五三
多田久藏が事……一五四
佐久間信盛僞りて勝頼に降る事……一五五
二股城攻め内藤櫻井功名の事一五六
蘆田信蕃二股城を退く事……一五八
信長公秋山伯耆を刑じ給ふ事一五九
松平忠次諏訪原城を守らるゝ事……一六〇
山内治太夫進士清三郎功を讓る事……一六一
長九郎左衛門能登國發向の事一六二
越中にて謙信月を賞せられし事……一六五
信長公松永彈正を恥しめ給ひし事……一六六
山口六郎四郎奥田三河守高屋城を落つる事……一六七
長阪釣閑跡部大炊邪佞の事一六七
東照宮勝頼と大井川にて御對陣の事……一六九
栗田刑部幸若が舞所望の事
附時田が首實檢の事……一七一

岡田竹右衛門見切りの事……一七二
朝日予介西郷伊豫を討つ事……一七二
菅沼定盈膽氣 附山口五郎作
後藤金助討死の事……一七四
岡崎三郎君の御事……一七六
攝津國花隈城落つる事……一七九
高天神落城仁科信盛戰死の事一八三

卷之五

勝頼の首穿鑿の事……一八七
秀吉勝頼の滅亡を惜しまれし事……一八九
信玄の舘の跡を信長公見給ひし事……一八九
勝頼天目山にて最後の事……一九〇
禪僧廣嚴院勝頼の屍を葬る事一九一
信忠慧林寺を燒かるゝ事……一九二
東照宮依田信蕃を助け給ふ事一九三
武田信綱誅戮の事……一九五
戸田半右衛門山口小辨佐々清藏功名の事……一九六
小山田信茂誅戮の事……一九七
馬場美濃が女召し出さるゝ事一九八
辻彌兵衛が事……一九八

明智光秀信長公を弑する事…一九九
秀吉備中にて光秀が書を取らし事……二〇一
秀吉西國の米を買はれし事…二〇二
光秀居城を築く事附辛崎の松の事……二〇二
森蘭丸才敏の事……二〇三
光秀反狀の事……二〇五
秀吉浮田を欺きて上洛の事…二〇六
黑田孝隆思慮の事……二〇八
池田家の使者筒井順慶を試みる事……二〇九
明智秀俊湖水を渡して坂本城に入る事……二一〇
東照宮和泉國堺より御歸國の事……二一二
小寺黑田始末の事……二一六
井口兄弟武勇の事……二二二
吉田六之介首供養の事……二二六
生田木屋之介武功の事……二二六
備前國福岡城合戰福井小次郎歌を遺して討死の事……二二七
再び福岡合戰藥師寺額田片岡三士討死の事……二三一

卷之六

山崎合戰の時堀秀政寶寺の山を取る事……二三五
森寺政右衛門武名の事……二三六
則武三太夫功名の事……二三六
瀧川一益厩橋を退く事……二三七
光秀愛宕山にて連歌の事……二四〇
幸田彦右衛門が母義死の事…二四二
志津が嶽合戰秀吉智謀の事…二四三
堀七郎兵衛見切りの事……二四四
志津が嶽七本鎗の事……二四五
石川兵助戰死の事……二四六
佐久間盛政生捕らるゝ事附久右衛門安次源六郎實政が事…二四七
尼子家の十勇士……二四九
信雄長臣を誅せられし事……二四九
平松金次郎始末の事……二五二
水野勝成高名並に行狀の事…二五五
本多忠勝忠勇の事並に忠信の冑の事……二五八
榊原康政秀吉を誹りて札を立てられし事……二六一
初鹿傳右衛門が事……二六二

秀吉東照宮の御陣へ戰書を贈られし事……二六四
東照宮蟹江御出陣の事……二六六
東照宮の御軍略に依つて蟹江城降參の事……二六六
九鬼嘉隆蟹江の湊出船の事…二六七
中村一氏紀州の一揆を追ひ拂はれし事……二六八
竹中重治の事……二七一
戰國の士功を讓る事……二七一
羽柴勝雅敵を免す事……二七二

卷之七

前田利家末森城後卷合戰の事二七五
利家島越城を攻めらるゝ事…二九二
本多重次强諫の事……二九四
秀吉東照宮に和を乞はれし事二九六
東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事……三〇〇
本多正信遠謀言上の事……三〇二
東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事……三〇四
信長公平手政秀を惜しみ給ひし事附小瀧甫庵信長記太閤記を著せし事……三〇五
謙信信玄二將の批評……三〇八
甲陽軍鑑虚妄多き事……三〇九

卷之八

仙石權兵衞九州に間者の事…三一七
島津家久島原合戰の事附惠藤某が事……三一七
立花道雪行狀の事……三二〇
道雪仁愛深かりし事……三二三
立花道雪紹運猫尾城の寄手に加はる事附道雪死去の事…三二四
稻葉一徹罪人を免さるゝ事…三二九
高橋紹運討死の事附立花統增薩摩に囚るゝ事……三三〇
紹運齋藤鎭實の妹を娶られし事……三四三
志賀親次山海が峰に兵を伏する事……三四四
高畑三河功名の事……三四五
森迫親正討死辭世の事……三四六
薩摩勢根白の砦を攻むる事…三四七
嚴石の城合戰坂小坂先登の事三五一

野矢甚右衛門功名の事……三五二
秋月種長降參の事……三五三
新納武藏守剛氣の事……三五四

常山紀談第一編目次了

常山紀談

備前國　湯淺新兵衛元禎輯錄

卷之一

長尾輝虎越後を治められし事

長尾輝虎のをさな名を猿松と申す。輝虎始めは景虎といふ。後京に上られし時、公方より輝の字を賜ひて輝虎と稱す。鎭守府將軍良兼四代の孫、左衛門尉致經二男村岡五郎忠通が末にて、其後長尾と稱す。後管領上杉の讓を得て上杉と稱す。甲陽軍鑑に梶原景時が末孫と云へるは誤なり。

兄を三郎と云ふ、猿松あち者にて父爲景の心に背く、是れ繼母の讒言故とぞ

聞えし。かくて出家にせよとて、下越後の橡原淨安寺に迫ひ遣られけり、金津新兵衛供して米山越にかゝる時、猿松八歳なれば、かちの上背に極き負ひて山を登り嶺なる堂におり居て、破籠やうの物取り出し參らせけり。猿松遙に頸城の府内を眺めやり、やゝ打ち涙ぐみて、我れ斯く零落るゝ事こそ口惜しけれ。やがて軍を起して、志を遂ぐるならば、此山に攀ぢ登り、府内を目の下に見下すべし。然るべき軍の地なりと云はれしかば、乳母子なる本條美作守も舌をふるひ、其詞な忘れ給ひそと悅びけり。

一説に、爲景、猿松を憎みて、其傅、城越前守に預けらる。此時十二歳、それより諸國を回りて、風俗を見、人情を察し、地の利を窺ふといへり。

かくて猿松九年の間、寺にあれども僧になるべき志なし。天文十四年爲景越中にて討死せり。嫡子三郎暗弱にて越後亂れ、所々を敵に掠め奪られたりしかば父の形軍せんと思ひ立ち、宇佐美駿河守定行を語らひ、天文十六年正月十八

歳にて元服し、平三景虎と名のり、橡尾の城に旗を揚げられたり。三郎是れを聞き、長尾越前守政景に、七千の兵を添へて攻め討たしむ。景虎矢倉にありて、敵は今夜引き返すべき物いろありと、いはれけるを定行聞きて、遙々と攻め來り、空しく退くべきやといふ。景虎敵に小荷駄なし、久しく圍むべき計にあらず。引き退かん處を擊たば、勝つこと疑なしと云はれければ、定行も然るべしとて、夜半に打つて出る。果して政景の軍亂れ立ちて敗北しけり。三郎又打ち向ふ。景虎柿崎の下濱に陣を取り、やがて三郎を打ち破る。三郎府内をさして引き退く時、景虎米山の東阪本にて、我れ眠り氣ざしたり。休みて後追ひ擊たばやとて小家に入る。定行あるべくもなしとて、追ひ討つならば破竹の勢とは是れなるべしと云へども、高鼾かきて眠られしかば、皆かゝる時を失ふことよと歎き合へり。やゝ有つて、景虎つと起き上り、三郎の軍兵山を三分の一彼方に越えたりと覺ゆ。いざ追ひ討てやとて馬に乘り、螺の貝吹き立てさせ、

龜破坂よりおとしかけ、大に打ち勝たれけり。定行今日北ぐるを撃つべき時、空眠せられしは、山を追ひ上らんに、敵をかさにうけなば利あるべからず、敵下り坂になりて引き立つたるを撃たんとの事なり、是れ老臣等が及ぶべきにあらず、今年は僅十八歳、弓箭を取る事、誰やの人か肩を並べなんとぞ語りける。景虎越後を治め得て、高野山に出奔せんとす。長尾家の長臣相集まり、景虎なくば國を敵に奪はるべし。いざとて關の山に追ひ行きて様々に留めければ、景虎の曰く、我れ年若く威重からず。老臣等我れを輕んぜば、國の根本立たず。此國人の爲に利を求むるは、我が身の害を招くなり。是れより後、吾が命を背くまじとならば、神文を書きて得させよ。さらずは留まらじと云はれけるに、素より君と仰ぎ奉るべきなり。如何で命を叛き申すべきと申しければ、さらばとて立ち歸り、三郎を隱居させ、是れより威をふるひ、越中に攻め入りて、父の弔軍遂げられけり。長臣の中に二心ある者を、林泉寺といふ處に

て、腹切らせて國を治められけり。晩年謙信と稱しぬ。

輝虎平家を語らせて聞かれし事附佐野天德寺の事

輝虎ある夜、石坂檢校に平家を語らせて聞かれけるに、鵺の段を聞きて、頻に落涙せられけり。かたへの者ども怪しみ思ひければ、輝虎の曰く、吾が國の武德も衰へたりと覺ゆるなり。昔鳥羽院の御時、禁中に妖怪ありしに、八幡太郎鳴弦して、鎭守府將軍源義家と名乘りければ、妖怪忽ち消えぬと云へり。其後賴政鵺を射たれども、猶死せずして、非野隼人さし殺してとゞめたりと聞ゆ。義家鳴弦せしは、天仁元年の事なり。鵺の出でしは、近衞院仁平三年なれば、僅に四十六年なるに、武德既に劣れる事遙なり。今又賴政におくるゝ事四百五十年、我れ又賴政に劣る事遠かるべければ、覺えず涙の流るゝよとぞ語られけゝ。又相似たる物語あり。附記す。相州北條の幕下佐野城主天德寺勇將

なりしに、ある時琵琶法師を平家に語らせて聞けるに、未だ語らぬ先に我れは唯哀れなる事を聞きたくこそあれ、其心得せよと云ひしに、法師承り候とて、佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出でたりしに、天德寺雨雫と涙を流して泣きたりけり。さて又今一曲、前の如く哀れなる事を聞きたしといへば、那須與一が扇の的を語る。半に及びて、天德寺また落涙數行に及べり。後日に側に仕へし者どもに、過ぎにし日の平家は、いかゞ聞きつると云ふに、皆面白き事に覺え候。但し一つ心得ぬ事こそ候へ。二曲ともに勇氣功名なる事にて、哀れなる方少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばせられ候。今に不審なる事と申し合ひ候ふと云へば、天德寺驚きて、只今迄は各を頼母しく思ひ候ひしが、今の一言にて、力を落したるぞよと、先づ佐々木が事をよく心に浮かべて見られ候へ。右大將舍弟の蒲冠者にも賜はらず。寵臣の梶原にも賜はらぬ生月を、高綱に賜はるにあらずや。其甲斐もなく、此馬にて宇治川の先陣せずして、

人に先を越されなば、必ず討死して、再び歸るまじき暇をして出でける。其志哀れならぬ事かはとて、屢々涙を拭ひつゝ、暫しありて云ひけるは、又那須與一も、人多き中より撰ばれて、只一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘り入れて、的に向ふに至るまで、源平兩家鳴を靜めて是れを見物す。若し射損じなば、味方の名折たるべし。馬上にて腹掻き切つて、海に入らんと思ひ定めたる志を察して見られよ。弓箭取る道程哀れなるものはあらじ。我れは毎も戰場に臨みては、高綱宗高が心にて、槍を取り候ふ故、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひやり、落涙に堪へざりし。然るに各は哀れに無かりしとや。思ふに各の武邊は、只一旦の勇氣に任せて、眞實より出づるにては無きやと思はれ候。夫れにては頼母しからずと歎きけるとぞ。

參河國伊田合戰の事

善德公(御諱清康安祥二郎三郎殿と世に稱し申す)士卒を憐れみ、勇材おはしませしかば、人々其德に靡き從ひ奉れり。尾張國に向はせ給ひ、森山に陣させ給ひしに、不慮の事出で來て、安部彌七郎弑し奉りける。植村出羽守、末だ新太郎(一説新六郎)と申せしが、十六歳にて御側に有り合せ、彌七郎をば立ち處に誅してけり。御家人馳せ集りて唯呆れ居たり。植村人々に向て御敵をば既に切つて棄て候、思ひ置く事もなし。腹切つて御供仕るべしといふ。人々主君の仇敵たらん者をたちどころに討ちし其功云ふにぬばず、これに候ふ者ども、御側にだに候はゞ、誰れか御身に劣るべき。御身一人幸に御側にありし事、これ神明の冥助とやいふべき。されば腹切つて冥途の御供申さん事、また誰れかは御身に劣るべき。されば各其所存の如くに振舞ひ然るべし。我等は必死近きにあり、今日徒に腹切らんとも存ぜずと答ふ。植村聞きて、其必死は如何と問ふ。其時抑我等必死は、僅か十日を過すべからず。殿斯くならせ給ひぬと、仇敵

の方に聞えなば、彈正忠信秀軍勢を率ゐて岡崎に攻め來らん。我れ等爰にて腹切らば、誰れか若君の御爲に、矢の一筋もはかゞしく射出すべき。されば我々が討死は、此時にありと覺ゆ。同じく死せん命、遲速は十日を隔つべし。御身が切腹を、强ひて留めんとにも非ずと云へば、植村聞きて、實に理かな。さらば人々と俱に、同じく討死をせんとて、岡崎に引返す。案に違はず織田信秀八千の兵を引率して、三河の國に討ち入り、大樹寺に陣取りたり。此時内膳の正信安も背き參らせ、上野の城に在つて兵をも出さず。昨日まで屬せし國人ども多く心變りしてけり。引き返したる御家人等、僅に八百人、我が君に御暇乞して、一同にどつと泣き叫びてこそ打ち出でけれ。二手に分ちて、伊田の彼方に打つて出づ。此人々の義心を、神明感じ給ひけん。此所に見え給ひし八幡宮の鳥居の、仇敵の方に向ひて、六尺餘り自ら動きけるこそ、不思議と云ふも餘りあれ。人々大に力を得て、寄せ來る仇敵を待つ程に、この所は、上は霜

枯の野路遙に、下は賤が田の面に通ふ道一筋あり。織田家の軍も、同じく二手に成りて、上道下道此方に向ひて寄せ來たる。八幡の寶殿の方よりして、白羽の矢降り來り、仇敵の上に落ちかゝると、見物の人の目には見えてけり。上に向ひし味方、野は廣し、眞中にとりこめられ、一人も殘らず討死す、植村下道より向ひて眞先をかく。味方僅に四百人、四千の仇敵を打ち破り、又上道に押し向ふ。野路の仇敵も散々に亂れ立ち、信秀からき命生きて、尾張一國に引き返す。これ伊田の合戰とて、十倍の敵に勝ちし事、例少なし、況して大將ましまさぬ軍して、幼き君を立てしこと、古今に比類あるべからずと、義臣の節操を語り傳へて美談とせり。

近江國音羽城軍の事

文龜三年、細川武藏守政元の臣澤倉といふ者、武略ありて近江を半切り從へ

けれども蒲生下野守貞秀入道知閑、音羽の城に據りて、澤倉と軍す。澤倉音羽は山城なれば、水乏しからんとて、水の手を取り切つたり。知閑敵より見ゆる矢倉の前に、馬ども數多率き出させ、白く精げたる米を桶に入れ、汲みかけて人々裸になりて馬を洗ふ。澤倉遙に見て、思の外に此城水多し。かくて久しく陣せば、兵粮盡きなんとて、圍を解きて引き退く處を、知閑案内は能く知りつ。小倉曖の要害に擊つて出で。一同に切りかゝり、十分の勝利を得たり。知閑は氏鄕の祖父なり。

荒木安藝守討死の事

大永年中、細川武藏守高國(入道道永と稱す)三好左衞門督と相戰ふ。三好桂川を渡りて、高國の陣へ押し寄する。波多野備後高國に怨ありて、丹波の兵を引き具し、高國に叛き、三好に與しければ、高國の軍敗れたり。高國の將荒

木安藝守、百ばかりの兵を引き分ち、人々此有様を見よ。月花酒宴の時の詞には似ざりしよ。恥を知る弓取りなき世なりや。我れ只今道永の爲に、命を棄てゝ恩を報ずべし。さらずは道永遁れ給はじ。此戰場を引き退きたりとも、人並なれば強ち獨のみ、誹らるべきに非ず候へども、義を義とせざるは、弓箭とる身に非ず。各又眞の士となりて、われと同じく義をふまんや。いなと思はんには強ふべからず、如何にと云へば、皆こは口惜しき事をも承り候。日比の所存を知しめさずと覺え候。いかでか斯かる時、汚き振舞をすべきとて、少しも落ちるべき色なし。荒木、さぞあらん、寔に主從の契、この世のみにはあらざりけりと打ち笑ひて、官軍の崩るゝを餘所に見て、ひしと折しき、待ちかけたり。阿波丹波の兵競ひかゝるを、間近く引きうけ、我れを誰れとか思ふ。管領の下に、荒木安藝守といふ者ぞと呼はり、一同に立ちあがり、歩驅けたる敵、十人ばかり突き伏すれば、退る處を追ひ立つる事五六十間ばかりを限

とし、離れ〴〵になるべからす。遠く追詰めて疲れなしそと、又其處に折しきかゝる敵を、待ちうけて突き退け、幾度となく戰ひたるに、敵討るゝ者數を知らず。荒木主從一人も殘らず討死しける間に、高國儀に近江に遁れ得たり。荒木平生士卒を愛するに悃情を盡せり。古の食を分ち衣を解き、樂を同うし苦を共にするの風あり。少しの功ある人を棄てず。ある時荒木が親しき由緣ある人と、荒木が士の輕き者と、俱に疫痢を煩ひけるに、療養力の限りに心を付けて、由緣ある人よりも勝りければ、これを恨みけり。荒木、緣者は我れ間はずとも心を附くる人あり。我が何某は賤し。賤しき者は、人おろそかにせん。我れ心を盡さずは、療養怠りあらん。緣者をおろそかにするには非ざれども、先づ重き處に心を盡せるなり。無事の時は緣者親しといへども、事ある時は士卒の切なる故なり。親しき一族由緣有りとても、陣々別れたれば、互に死生も知られず。士卒は戰場に死生を共にするものなれば、一人とても本意を失は

ん事我が大なる患なりと答へけるを、士卒聞て、人々恩を思ふ事、骨髄に徹せりとなん。

甲斐國韮崎合戰の事

武田晴信父を逐ふの後、諏訪頼茂、小笠原長時、多兵にて甲斐に攻め入り、韮崎にて一日の中に合戰四度に及べり。晴信韮崎に向ふ時、諏訪小笠原のもとに由緣ある者、原加賀守を始めとして、數多甲府に殘されければ、原人々に向ひ、今日の合戰に、各たち功名を遂ぐべきに、留め置かれしは、二心を疑びての事なり。今日敵に向はずば、長く弓筒取る躬の恥とならん。いかにと云ふに、皆二心なく疑を蒙らんより、敵にあひて討死せん事、勇士の志に候ふとて、我れ先きにと韮崎に馳せ行きけり。此時晴信軍する事三度、戰ひ疲れたる所に、頼茂長時一手になりて、進み來れば、既に危く見えしかども、原が來るに

力を得て、勇み進む晴信、原をよびて其志を感じ、日向今井等を後に控へさせ、競ひかゝる敵に當りて打ち破られけり。是れ晴信士を激勵の策にて、わざと原等を甲府に殘されしなるべし。

筧平三郎功名の事

織田備後守信秀、松平三左衞門忠倫と密に謀りて、岡崎の城を攻め奪らむとす。岡崎に泄れ聞えしかば、廐政公甚だ憤らせ給ひて、筧平三郎重忠を召し、上和田に往きて、僞りて降參し、三左衞門を刺し殺し來れ。偏に汝を頼むよと仰せありしかば、負承り候ふとて、上和田に至り、降參する由たばかりければ、三左衞門岡崎の士、心を通ずる者あれども、筧兄弟を味方にせばやと思ふ折柄なれば、大に悦びて懇に優待しにけり。かくて夜深けて後、案内はよく見屆けつ、忍び寄りて、賜りたる脇差にて、三左衞門が脇腹を二刀刺して遁れ出る。

平三郎が弟助太夫正重も、兄が後を慕ひて上和田に至り、隍の中に隠れ居たりしが、待ちうけて、打ち連れて岡崎に歸る。上和田の者ども追ひかくれども及ばず。應政公感狀を賜はり、羽栗にて百貫賜りぬ。天文十六年十月の事なり。應政公は東照宮の御父なり。

一説、脇差を賜はりける時、これを以て刺し殺すべし。突き貫きたる刄をぬけば必ず聲を立つべし。然らば起き合せ、追つかけて、汝遁れ得じ。突き棄てゝ遄歸れと仰せられしかども、賜りたる脇差をすてんこと、本意に非ずと思ひ、拔いて出でければ、果して三左衞門聲を揚げ、人を呼びける故、各一起き合はせて追つかくれども、疾く逃れ得て歸るといへり。又一説に、平三郎は忠倫が平安城長吉の刀を取り得て歸り、忠倫を刺し殺せし標と申せしかば、即ち其刀を平三郎に賜りけるとも云へり。

佐伯惟常高崎城を乘り取る事

天文年中大友義鑑の臣、朽網下野親滿謀反して、高崎の城の二の丸を乘り取りて立て籠りしに、佐伯惟常は大友家の旗下なるが、斯くと聞き、杵築より馳せ來りぬ。佐伯平生鷹狩を好む。專ら狩の爲には非ずして、軍だちの爲なり。狩に出る時、ある日途中より使を走らせて士を呼ぶ。士に將たる者は、騎馬の軍兵を引き連れて即時に來る。歩士又は弓の物主たれば、組の卒を引き連れてかけ集る。これゆゑ不意の時といへども驚ぐ事なし。半時ばかりの間あれば、數日前より下知せしよりも、陳列整ひて靜かなり。使に走らかす者は、壯なる者を三十人選びて、馬の前に打ち連れたり。常に駈け走りに馴れて、息長く足健にして、馬にも劣らぬ程なり。此時佐伯が士、杉谷次郎太郎、同次郎三郎とて兄弟あり。相共に一番乘を志し、城の堞何れの方か、上るによろしからん

と、目を配りけるに、堺の隅あり。爰に目を附け、素槍の柄を、四五所縄にて足溜りを結ひ、一同に攻めかゝる時、杉谷兄弟、兼て心を付け置きし所に、始めより近附き居て、走り附くと槍を立て掛け、終に登り越えて一番に入りたり。

北條早雲智計の事

北條早雲、盲人は無用の物とて、小田原領分の盲目法師を搦めて、海に柴漬に沈めんとせられしかば、盲人皆四方に逃げ散りける。其中を潜に間に用ひられしとぞ。

毛利元就嚴島合戰附盲人間者の事

陶尾張守晴賢、大内義隆を弑しければ、毛利元就陶を打ち滅さんと計られけり。陶盲目法師一人を間者として、元就の謀を知る。元就始めは斯くとも知

られざりしが、やゝ心付きぬ。ある時陶が臣永來丹後守、我れに志を通ず。晴賢を打ち破らん事、近きにありと語られけるを、彼の法師頓て陶に告げたりけり。元就又書簡を贈らる。永來は周防の岩國の城にあり。彼の書簡を、山口にて奪ひ取るべきやうに支度せられければ、陶大に怒つて永來を殺しぬ。元就彌彼の法師を近附け、平家を語り習ふと稱し、傍を離されず。陶傳へ聞て悦ぶ事限りなし。元就また或夜、軍評定せられけるが、敵大軍にて、宮島に押し渡らばいかゞはせん。是れ吾が亡ぶべき運の極と覺ゆるなり。又草津廿日市に押し寄せなば、岩國の弘中參河守、我れに心を合はすれば、裏切させて、陶をうち破るべしとぞ語られける。是れは陶を防がん地に、櫻尾の城ならでは、然るべき要害なし。宮島に渡らば、乘り來る船を燒きたて、歸路を塞ぎて、軍すべしと思ひける故なりけり。盲目法師斯くと陶に告げければ、さらば宮島を攻めなんといふ。弘中參河守隆包然るべからじといへども、陶は弘中が二心を疑

ひて聞きも入れず。弘治元年十月、四萬餘り大船にとり乗り、宮島に打ち渡り四方を取り圍みたり。元就も今度は十死一生の軍と思ひ定め、吉田の城を出で、僅に四千ばかりの兵にて後巻せられけり。こゝに地御前の祝日ごとに、蛤船に乗り、宮島に渡りけるを近附け、心を合せ、士一人祝の眞似させ、宮島にわたらせらる。陶が者ども、元就は如何にと問ふ。祝さん候、元就は草津廿日市へ陶殿押し寄せ給はんには、勝利なるべきを、宮島を攻めさせ給ふ故、手段空しくなりぬとて、火立浦に呆れておはし候ふが、引き返され候らめと語る。是れより陶が者ども怠りぬ。元就は密に軍の支度をなし、一手は洲屋明神の前より、船よりあがり、天本の御前を、多賓如來の傍を通り、宮島の町口へ向ふべし。一手は吉田郡山の百姓ばら五千餘に、嫡子隆元を大將として、彌山島より西の山々の木末に松明を結ひ附け、百姓ばらに、手々に松明二つ持たせ、夜半の鐘を相圖に、同時に火を附けよ。吉川元春は船にとり乗り浦口に

かけ並べたる陶が船どもを焼き沈めよと、謀を定めらる。十月晦日今日草津に引き退くべし。風雨止まずば、元就は今夜火立浦に留まるべし。二日の兵粮を、物の具の上に附けよとて、小荷駄どもを先づ返して、引き退く體に持て做し、日も稍暮れければ、俄に唯今宮島へ渡り、思ふ敵を討ち取るべし。疾く船に乗るべしと下知し、ひた〳〵と打ち乗り篝な灯しそ。元就が船の灯を標に、艫舳の梶を守れとて、酉の刻ばかりに、火立浦を出る折節、北風激しう吹きたりければ、追手の風ぞと勇み進んで、亥の刻ばかりに、宮島の西に著きて陸に上り、船をば一艘も殘らず、火立浦に返されけり。元就彼の盲目法師を引き出し、已れ故にこそ、今日年頃の志をば遂げつれとて、海中に沈められけるとかや。隆元は彌山島に打ち上り、元春は洲屋明神の前より押し寄る。小早川隆景は搦手より向ひたるが、一度に鬨の聲を揚げ、彌山島の木末に結ひ付けたる松明に火を付けたれば、陶が軍兵驚き騒ぎける處を、元就喚いて先をかけたれば、陶が

者ども數百人討死しけり。元春隆景も横様に進みて、三浦越中守と隆景槍を合せ、三浦を突き伏すれば、内藤内藏允より合ひて首を取る。弘中三河守も討たれ陶が軍散々に敗北しけり。陶も旗本を進めて隆景と戰ふ。元就の兵栗屋又四郎眞先かけて討死す。元就側より切つて懸り、終に打ち勝つたれば、陶は引き退きて道場山にあり。明くれば十一月朔日、元就諸軍を集め、卯の刻より午の時まで、十二度の戰に、互に討たるゝ者數を知らず。陶終にかなはで自害しけるを、首を取り出して梟せられぬ。討ち取る所の首四千七百八十餘、生擒八百五十餘人とかや。是れより西國元就に靡き從ひけり。

元就伊豫の河野に船を借られし事

宮島合戰の前、陶伊豫の河野に船を借る。同じ時、元就も又船を借りに使をやられけり。陶は何となく借りたり。元就は只一日貸し給はれ。宮島に渡りて、

即ち戻すべしと云ひ送られければ、久留島通康聞きて、一言なれど思ひ入たる處あり。毛利必ず勝つべき事疑ふべからずとて、三百艘を貸したりけるが、果して陶敗れて滅亡しき。

那須の臣大關夕安深慮の事

野州宇津宮の軍、那須に寄せ來りけるを擊ち破り、既に大將をも討ち取るべかりしを、那須の長臣大關夕安兵を纒めて北ぐるを追はず、人皆今度宇都宮をも破るべきにといふを、夕安聞きて、

雲は皆拂ひ果てたる秋風を松に殘して月を見るかな

といへる古歌あり。今味方にさせる根本の固もなくて、宇津宮を攻め破らば、小田原より那須を敵とせん。然らば如何にして那須を守り固むべき。宇津宮を殘して小田原をあひしらはせ、其隙に那須の根を深く帶を固くして、小田原を

敵にもしつべしといふ。皆人これを感じけり。

太田持資歌道に志す事

太田左衛門大夫持資は、上杉宣政の長臣なり。鷹狩に出でゝ雨に遭ひ、ある小屋に入りて、蓑を借らんと云ふに、若き女の、何とも物をば云はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、花を求むるに非ずとて、怒りて歸りしに、是れを聞きし人の、それは七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ悲しき、といふ古歌の心なるべしといふ。持資驚きて、それより歌に志を寄せけり。宣政下總の臨南に軍を出す時、山涯の海邊を通るに、山の上より弩を射かけられんや。又潮滿ちたらんや計り難しとて、危みける折節、夜半の事なり、持資いざ我れ見來らんとて、馬を馳せ出し、やがて歸りて、潮は干たりといふ。如何にして知りたるやと問ふに、遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴く音に潮の滿ち干を

ぞ知る、と詠める歌あり。千鳥の聲、遠く聞えつと云ひけり。又何れの時にや、軍をかへす時、是れも夜の事なりしに、利根川を渡さんとするに、暗さは暗し淺瀬も知らず。持資又際涯なき淵やは騷ぐ山川の淺き瀬にこそあだ波は立て、といふ歌あり。波音荒き所を渡せと云ひて、事なく渡しけり。持資後に道灌と稱す。

雪玉實隆の歌に、雨にきるみのなしとてや山吹の露に濡るゝは心つかじを、抄中後拾遺和歌集云、小倉の家に住み侍る頃、雨降り侍りける日、蓑借る人の侍りければ、山吹の枝を折りて取らせて侍りけり。心も得でまかり過ぎて、又の日、山吹心得ざる由、云ひおこせて侍りける。返しに云ひ遣しける。兼明親王、七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞあやしき。「かなしき」イニアル歟

持資京に上りし時の事附斯る時の歌の沙汰

持資京に上りし時、慈照院殿(義政)饗應せんとなり。慈照院殿に一つの猿あり。見知らぬ人をば必ず搔き傷ふといふ事を持資聞きて、猿使に賂して猿を借り、旅亭の庭につなぎ、出仕の裝束して、側を過ぐるに、猿飛び懸かるを、鞭を以て思ふさまに叩き伏せたれば、後には猿首をたれて恐れ居たり。持資猿使の人に禮謝して猿を返したり。かくて饗應の日、豫て慈照院殿、彼の猿を通るべき所に繋ぎ置きて、持資が狼狽するを見んと待たれたるに、持資を彼の猿見るとひとしく地に平伏す。持資衣紋引き繕ひ、打ち過ぎたりければ、唯人に非ずと、大に驚かれたるとなり。彼の猿を繋ぎたる戸を、猿戸と云ふ。それより猿戸と云ふ名は起れるとなり。

道灌は讒言によりて殺されたり。文明十八年七月廿六日なり。辭世の歌と

て、世に云ひ傳ふる、かゝる時さこそ命の惜しからめ豫て無き身と思ひ知らずば。松田が家の物語にも、斯く記したり。道灌の和歌の集に見えしは戰士を悼みし詞にて、康正元年の冬、藤澤の役に至り、敵も味方も入り交り、三日を重ねて挑み爭ふ事になりぬ。されども、館の武威强うして、北條憲定の主、終に自腹して、餘兵己が志空しうなり、或は仇にあたりて互に死するも侍りし時、藤澤の傍の松原の叢にて、戰ふ男ありしに、味方中村治部少輔藤原重顯とて、京家の人の世にしづみて館に扶持せられて侍りしになん。敵の男は栗毛なる駒に乘りて、二つ引き輪登り龍の紋付けたる指物なりけり。遠目ながら鎧いかめしく見えける。暫し戰うて鎗を合せしに、目の前に敵の男突き留められ、やがて中村が手づから首を取りて、我が陣に來りて、かう〳〵なんと語りけるに、未だ壯年にも足らぬ男の色白くして丈高かるべき心持して、鬢の邊りたゞならず薰きしめつ

つ哀もいや増し、仇ながら憎からぬ面影なり。中村重顯此心ばえの優しき、歌一つ物して手向にとすゝめければ、其首に向ひて、斯かる時云々と見えたれば、松田物語幷に世に傳ふる所は誤なり。

木全知矩連歌の事

安藝佐伯郡に、木全知矩といふ者あり。後に宗哺といふ。毛利元就に從はざりければ、圍み攻めらるゝに、兵粮既に乏しくなりて、降參を勸めらるゝに、父祖よりうけ傳へたる城を、容易く人に授くべきやとて、彌〻服從せず。宗哺は連歌に心を寄すると、元就聞き傳へて、箭文を城中に射入れさせられけり。

秋風にかたき木またの落葉かな（一說、秋風にまだき木またの落葉かな）

やがて射返しけるに、

寄せ來て沈む浦浪の月

元就大に感じて、圍を解きて引き返し、程經て和を求められければ、宗哺我れより降參せばこそ恥辱ならめ。此上はとて城を出でけるを、元就懇に持て做し、賓客のやうにせられけり。

輝虎私市城を攻められし事

輝虎武藏の私市の城を圍まれし時、此城は後に大なる沼有て、堅固の地なり。本丸を外より見ゆるやうに築きたりけるを、打ち巡り見られしに、本丸より二の廓に移る廊下の橋、簀子にて作りたるに、地白の帷子著たる人の影、水にうつらひ見えたり。地白の帷子と云ふは、地を白く紋を黑く染めたる物にて、其比女の多く着たる物とぞ、輝虎是れを見る事三度に及べり。かゝれば本丸には、人質の女童を籠め置きつると察し、やがて柿崎和泉に下知して、大手を攻めさせられけり。城中あはや唯今攻めらるゝと云ふ程に、我れ先にと防ぎけ

る。其暇に近き邊の民屋を壞ち、筏に組みて、後の沼に打ち入れ、間の聲を揚げ喚き叫ぶ。本丸の女童大に驚き騷いで、二の廓をさして逃げ迷ふ。大手に有て防ぎける兵ども、さては内通の者ありて、本丸を打ち破られたると思ひ、或は自害し、或は降人となる。輝虎の謀によりて、力を勞せずして、城忽ち落ちたりけり。

輝虎太田三樂が子を質に取られし事

輝虎と北條と、武藏の忍にて陣を合はす。此時太田美濃守資房入道三樂密に謀を北條に通ず。輝虎かくと聞きて、馬副の者も具せず、唯一騎三樂が陣に行きて、三樂が三男安房守十二歳なりしをひしと捕へて、よくも成長ちつるよ。いざ我が子にせんとて、打ち連れて歸られけるに、三樂が軍兵ども、其猛威に恐れて、手指すことも無かりけり。是れより三樂も、誠に心服したりけるとかや。

卷之一 終

卷之二

東照宮大高城へ兵粮を入れ給ひし事

今河義元尾張國大高の城に、鵜殿三郎長持を置かれけり。織田信長も所々に城を構へ、丹家には水野帶刀、善照寺には佐久間左京、中島には梶川、鷲津には飯尾近江守宗定、又丸根には佐久間大學助盛重を置きて、其外寺部舉母廣瀨にも砦あり。大高に兵粮を入れなば、鷲津丸根に貝を吹くべし。寺部舉母廣瀨の砦より馳せ集り、丹家中より島り後詰せよとぞ定められける。義元東照宮の御許に使をもて、大高に兵粮を運び入れさせ給へとなり。東照宮心得候ふと仰せて、やがて打ち立ち給ふを、酒井石川等信長の手當ゆゝしく候、中々大高に兵粮入れん事、思ひも寄らずと申せども、聞し召し入れられず。われに謀有りとて

先づ兵を分ち、福釜の松平左馬助親俊、酒井與四郎忠親、石川與七郎等四千ばかり、永祿二年四月九日の夜半に、大高鷲津丸根をわきになし、寺部の砦へ押し寄せよと下知し給ふ。東照宮は八百ばかりの兵を率ゐ、兵粮米馬に取り積ませ、大高の城二十町ばかり側に控へ給ひけり。先陣寺部に押し寄せ、城中騒ぐ處を、一の木戸口打ち破り、火をかけて、又梅坪に押し寄せ、三の丸まで攻め入り、火を放ちて燒き立づる。其焔天を照らし、闇の壁響き渡りて聞えければ、丸根鷲津より是れを見て、三河の敵遙々と踏み越えて攻め入りたるは、いかさま故ありと覺ゆるぞ。疾く後詰せよとて、寺部梅坪に駈け向ふ。其間に東照宮麾を取らせ給ひ、米負せたる馬千二百匹打ち連れて、事なく大高に運び入れさせ給ひけり。丸根鷲津に殘る者ども、是れを見れども、大方後卷に出でたれば詮方なし。東照宮やがて軍兵を引き纒ひ、岡崎に返らせ給ふ。人々今夜の謀略、及ぶべきに非ずと申しければ、聞し召され、これ甚だ知り易き手段なり。

先づ思ひも寄らぬ寺部梅坪を攻めて火をかけ、丸根鷲津の軍兵を後詰めに出でさせ、引き違へて兵粮を運び入れたりしなり。兵法に神速を貴ぶと云ひ、又其不意に出づると云へることありと宣ひければ、皆此殿臨濟寺の雪齋に、兵書を讀み習ひ給ひしかども、かゝる謀はよも出でじ、天性勝れて、大將の道を得給へるとぞ申しける。これ十八の御歳の事なり。

大久保忠俊の事

大久保藤五郎は越前の人なりしが、武者修行して三河に來り、吾が姓を讓るべきは、宇津新八郎なりとて、大久保の姓を讓りしが、其標に功名せんとて、安祥の城攻めに先驅けして、終に討死しけり。新八郎忠俊後に五郎右衞門といふ。今川義元討たれて、東照宮大高をひかせ給ふ時、夜半に大雨にて士卒亂れけるに、忠俊御前に附き添ひ奉り、度々乘り返し詞をかけ、人衆をまとめて引き

退きけるとなり。

桶狹間合戰今川義元討死の事

永祿三年五月、今川義元大軍を率ゐ、織田信長を討つ。東照宮此時陣せさせ給ひ、丸根の砦を攻め落し給ふ。今川家の軍兵も鷲津を攻め落し、義元桶狹間に着陣せらる。信長は素より鳴海に打て出で、防戰せんとの志なり。老臣ども大敵なれば、清洲を守り給へと、諫むれども聞き入れず。酒宴して猿樂に羅生門の曲舞を舞はせられし時、敵既に攻め來ると告げ來る。信長少しも騷がず、人間五十年下天内を競ぶれば、夢幻の如しといふ處を、推し返し謠ひて忽ち螺を吹き立てさせ、物の具して、主從僅に六騎、歩卒二百人ばかり驅け出て、熱田の宮に詣で、願文を神殿に納めらるゝ中に、軍兵追ひ續き來りけり。源大夫の祠より東を見れば、鷲津丸根攻め落されたりと覺えて、黑烟立ち登る。

濱手は潮滿ちたれば、笠寺の東の道を、一文字に進んで、砦々の味方に使を馳せ、其兵を引き具し、中島の砦に至りて、我が謀は、今川の大軍悉く本道へ繰り出し、旗本小勢ならん所へ、山陰より切つてかゝり、忽ち勝負を決すべきと、大音聲にて下知せられしかば、士卒皆競ひ勇みけり。旗を絞らせ、山陰より桶狹間に打ち向ふ。義元は駿州の先陣打ち勝ちたりと悅び、酒宴してありしに、折しも天俄に曇り、夕立うつすに似て、風雷激しかりければ、信長の兵懸かり來る物音も聞き分かず。不意の戰に周章てたるばかりなれば、水野太郎作清久、一番に首を取る。義元の網代の輿を信長見て、敵の旗本疑ひなしとて、追ひ立て〳〵戰はれしかば、義元も返し合せて戰はれしを、服部小平太槍つけ、毛利新助其首を取りたりけり。左文字の太刀松倉郷の刀を分捕にすといへり。

信長上京の事

信長桶狹間にて、義元を討ち取りて後、潛に士七八人召し具し、京に上り、帝都の事ども窺ひ見、それより三好が高屋の城に往きて、長慶に望まれけるは、信長が尾張にて領し候ふ地を參らせ候ふべし。其地に當る程畿内にて賜りなば、三好家の先陣たるべし、と云はれしかば、三好聞き受くべきを、松永彈正諫めて、其事止みにけり。此時齋藤義龍、信長を殺さむ爲に、士十二人堺の津に出したり、と信長聞きて、堺に到り、義龍が士の旅宿に行き、何義龍が討手とや、憎き奴原なり。汝等一々首を刎ぬべしとて、刀の柄に手を掛け、はたと睨まれたる勢に、恐れ狼狽て〻平伏しければ、信長散々に罵りて歸られけり。

東照宮大高城を引き取り給ふ事

義元討死の時、東照宮は大高の城におはしませしかば、刈屋の水野下野守信元、淺井六之助道忠を以て、桶狹間に義元敗軍命をおとされ候ひぬ。今川家の城々ども、皆明け退き候、疾く岡崎へ歸らせられ、然るべからん、と告げ申されしかば、早御歸りあれと、人々申しけるを聞し召し、下野守は、我が母の兄弟なるは、誰も知りたるよ。されども、今は敵と分れたる中なれば、若しや、我れを計らんとの謀なるを知らで、此城を明け退きなば、逃げ走りたりと云はれん事、弓箭取る身の恥辱、後の世までも笑ひ草たるべし。淺井を推し留め置きて、味方の告げを待ちて後こそ、參河へは歸らめ、と仰せありて、それまでは二の丸におはせしが、本丸に入らせ給ひて、持口を御配りありける處に、夜に入りて、岡崎より鳥井伊賀守忠吉、義元の變を告げ奉り、今川家の人々も、駿

州へ引き取る旨を聞し召し、此上は兵を返すべし。されども、夜閤くて亂るべしとて、月の出づるを待ちて、城を打ち出でさせ給ひ、淺井を嚮導に用ひられ、池鯉鮒の驛に著かせ給へば、苅屋よりも討つて出で、所々一揆起りけるに、淺井馬を乘り寄せ、水野下野守使者、淺井六之助案内者たるよし、大音に呼はりければ、皆道を開きて、恙なく夜中に大樹寺まで引き取らせ給ひぬ。後殿は大久保五郎右衞門忠俊なり。翌日岡崎に歸り入らせ給ひけり。淺井をば池鯉鮒より返させ給ひ、後の證にとて、御扇子を裂きて、賜はりける扇の骨、六本なりし故、永く淺井が家の紋とするとかや。是れより、東照宮の信義厚き御事に、人々懷き從ひ奉りける。

武田信玄忍びの者を討たれし事

甲斐の忍びの者數十人、信玄に叛く事有りて、山小屋に立て籠る。信玄謀にて、容易く討ち取らばやと思ひ、殘り居ける忍びの者に、城中に忍び入るに、如何なるが入り難きや、と問はるゝに、内の守り嚴しく、夜廻りの聲繁く、其體顯なるは、怠りも亦料り易く候ふと云ふ。信玄、今山小屋に、忍び入らんはいかに、と問はるゝに、彼の者ども既に能く其理を知り、靜まり返りて、音もせず候へば、其便を得ずと答ふ。信玄それより山小屋に向つて陣し、守り甚だ嚴しく、夜廻り透間なく呼はらせたり。日數を經て、やゝ怠り出來ぬる時、山小屋より夜討に出でけるを、素より謀りたる事なれば、伏兵を置きて討ち取られけり。

信玄鹿島傳右衞門を呼ばれし事

鹿島傳右衞門と云ふ者は、伊豆の人なり。若き比、武名ありけるが、後に髮を薙ぎて、久閑と稱し、伊東に引き籠りて居たりけるを、信玄聞きて、三千貫の

地を與へて招けり。久閑我れ年老いたり。何の爲に泰公すべきとて、出でざりけるを、尋れ問ふべき事ありとて、强ひて呼び出し、春より秋まで、夜々軍物語せさせて聞かれ、自ら筆とりて、是れを書き記されけり。信玄四方に大國の敵ありて、威名を震はれしも、斯く心を用ひられし故にや。

備前國龍口落城の事 附浮田直家の事 並岡剛助高名

永祿年中、備前上道郡龍口山の城に、最所治部元常と云ふ者あり。此時浮田直家既に浦上を滅し、直家は和泉能家の孫なり。能家はもと浦上掃部助村宗に仕へ、備前邑久郡砥石の城に居れり。浦上の長臣島村豐後守、後入道して貫阿彌と云ひしは、鷹取山の城にありて、威勢ありて能家を殺害せり。これ享祿四年の事なり。浦上細川高國の加勢として、攝州にて討死す。その子與次郎と云ひしは幼少にて、居城三石は播州の境、敵に

近き故、和氣郡天神山に移れり。與次郎は浦上遠江守宗景と云へり。年長じて備前皆從ひ、美作も半屬せり。宇喜多能家の子を興家といふ。父死する時出奔し、甚だ愚にて、備中邊にさまよひ、乞食の體なりしが、備前に歸り、西大寺福岡のかたへにありけるを、父に懇なりける阿邊定善といふ者養ひ置き、愚なれば、牛飼童とせり。年經て召使ふ下女を妻せて、子三人あり。直家忠家春家是れなり。天文五年興家死す。三子の中、直家八歳なるが定善が方にあり。弟二人、六つと四つになりけるを、笠加の尼寺に、直家の母の姉、比丘尼となり居たるに賴み置けり。直家物靜かなる生得なりしが、十一歳の比より、俄に愚昧になりて、誠に菽麥も辨へず。天文十五年、直家十五歳になりぬ。母の方に行けば、母涙を流し、三人中にも兄なれば、切めて人並にもあれかしと思ひしに、勝れたる愚さよ。人並ならば、殿に申して草履をも取らせなん物を、如何なる

因果にて斯く憂き事を見るやらん、と打ち萎れたるを、直家見て側近く居寄り、實に愚なるには候はずといふ。母聞きて、汝ほど愚ながらも、猶賢しと思ふやと、愈々歎く體なり。直家、爰に一の大事あり、誰れにも語らせ給ふな、もし洩らし給ふ程ならば、其事叶ひ候ふまじと云へば、母それは如何なる事ぞと問ふ。直家能く聞かせ給へ。祖父泉州をば、島村が殺したりき。父仇を得討ち給はで、口惜しくこそ候へ。如何にもして、一度祖父の吊を遂げんと存ずるに、島村を殺すに、過ぎたる事や候、我れ若し賢きと島村聞きなば、其儘に助け置くべきや。只是れのみ心を苦しめ、謀をめぐらし、祖父の恥を雪がばやと存ずるなり。はや十五に成り候ひぬ。殿(宗景をさす)に奉公仕らんやうを計らせ給へ。假初めにも、此一大事口に出させ給ふな、と云ひたりしかば、母驚き且悦びて、密に宗景に告げて、直家初めて仕へけり。直家斯る智謀ありしゆゑ、宗景寵愛し、乙子の城を

預けたり。此時三郎右衛門とぞ云ひける。此比中山備中は、沼の城にありしが、宗景の心に背く事あり。宗景直家に密談す。直家某は中山が女を妻とし婚姻の好深き者なるに、かゝる仰せを承る事、不忠を存ずまじきと知し召されしならん。力の限り計り見ばや、只一つの願の候、それを免し給はらんやと申す。宗景悦びて、何事にもあれ、望むべき事、其志に任せん物をと云へば、祖父忠功の者にて候ひしに、島村私に殺したりき。君を輕しむる者なれば、願ひ望まずとも、心ず誅せらるべき者なり。祖父の仇に候へば、免を蒙りて、殺し申さんと告げゝれば、宗景聞きて島村汝が祖父を殺せし時、予幼かりしゆゑに、島村權威を恣にしたりき。今我れも憎み思ふ處なり。謀能くして、島村中山二人を討つべし、と免したりしかば、直家沼の城川の東に、茶園畑といふ所あり、爰に茶店を設け、鷹狩に出て日暮るれば、此所に入りて臥し、又沼の城に行きて、いと打ち

解けたる親みをなせり。或る時直家中山に、此川隔りて、南の方に廻れば道遠し。茶園畑より直に川を渡らん。爲に假橋を架けさせられよ。常は取り置きて、往來の時のみ架けなん物をと云へば、備中易き程の事とて、然かしたりき。直家計り得たりと悦びて、宗景に告げて、沼より天神山の間に、狼煙を揚ぐべし、然らば備中を討ち得たりと知られよ。狼煙揚げなば、島村がもとへ使を馳せ、中山謀叛したる故、直家に下知して討たせぬ、疾く沼に駈け向ひて、直家に力を合はせよと下知あらば、島村年老いたれども、遠く慮るに暇なくて、一騎駈に、沼の城に來るべきを討たん事易かるべしと、日を約しぬ。かくて其日に及びて、沼の鷹狩場に直家有りて、日暮れになりて城に入り、捕り得たる鳥を出し、酒宴に及べり。夜も痛く深けぬ。備中も醉ひたりけり。直家我れ今夜は、爰に臥すべしと云へば、備中が士も座を退き出でぬ。直家打ち臥す體に持て做し、思ひも寐

けぬ不意に、備中を只一刀に伐り殺し、躍り出て大音聲をあぐれば、兼て相圖しける者ども、城下に忍びて待ちかけたれば、我れ先にと、城内に馳せ入りしかば、城中何事ぞと驚き合へり。川向ひに伏したる兵も鬨を作り、彼の設けたる假橋を攻め入り、狼狽へたる中山が士どもを、切り伏せ〳〵、城を攻め取りけり。かくて狼煙を揚げしかば、宗景即ち島村がもとに、使を馳せて告げやりしかば、島村聞きて、纏け者共とて、馬に鞍置かせ打ち乘り、從兵七八人許にて、沼の城に來る。城は疾く乘り取りたれば、直家本丸にありて、門を閉ぢたり。島村斯かる謀ありとも知らず、本丸に入る處をかれて計り合せたれば、取り圍みて討ち取りたり。島村が軍兵一騎駈に疎に成りて來るを、道に待ち受けて討ち取り、やがて兵を出して、鷹取山へ押し寄すれば、防ぐ者なくて退き、ちり〳〵に成りぬ、直家の手段にて二人を殺し、これより勢強く沼の城に居て、砥石には弟の春家を置

き、終に浦上をほろぼして、備前を悉く平均せり。

沼の城に居て、元常と姻類なりしに、元常毛利家に語らはれて、直家に背く直家打ち滅さんと思へども、龍の口は峯高く、大川麓に繞り、要害よかりければ、力攻めにして、落つべきやうもなく、矢津に砦を構へ、軍兵を籠め置きたり。直家岡郷介といふ謀ある者に、密に手段をいひ合せ、ある時直家、郷介は云々の罪あり、搦め來れ、首を刎れんと云はれしかば、討手の士行き向ふに、疾く出奔してけり。直家偽りて、怒る事大方ならず。郷介は備中に隠れ居たりけるが、西郡の中にて、乞食の老女の道に臥し居たるに立寄り、こはそも不思議にも、悲なくおはしけるよ。年比志を盡し、尋れ參らせしに、行逢ひぬるこそ嬉しけれ。されど淺ましの有樣や、さぞ見忘れ給ひたらん。幼き時立ち別れ、懐しの母上よとて連れ歸りぬ。乞食の女は、怪しき事に思へども、俄に豐なる躬になりければ、知ちぬ體にてぞありける。やゝありて、郷介龍

の口山の川向ひ、金山寺山の谷山船山の城主須々木豐前が許に仕へ、尋れ出せる乞食の老女を、己が母と名づけて人質に出しけり。須々木は故有りて、元常と不和なり。ある時、須々木が東國より求め得たる黑の馬を盜み出して打乘り、山下へ馳せ下る。城中より、何とて馬に乘るやと呼はれども、耳にも聞き入れず、枚石川原を、東へ駈け行きければ、須々木も矢倉に上り、これを見て、憎き奴哉、討ち止めよ、と下知しけれども、疾く川を打ち渡り、龍の口の城に乘り上り、船山の須々木が士にて候、故なきに、死罪にあひ申すべき由を、人の知らせ候ふ故、遁れ參りて候、あれ見給へ、追手の者ども、川向ひに滿ちて候、城中に隱され候へ、といひければ、元常先づ山下に隱し置きけり須々木が士ども、岡に詐されたるとは知らず、かの乞食の老女を、川原に引き出し、歸らずば母を殺すべし、と聲々に呼はりけり。岡あの老女は母にて候今歸りたりとも、母子一所に死ん事定りたり。とても棄つべき命を君に奉り、

此憤りを散じなんと云ひける中に、彼の女をば、磔にして殺しければ、郷介悲み怒り、母の仇目前にあり。如何にして此恨を報ゆべきと、齒を嚙みて歎きければ、元常も心免してけり。岡飽く迄さかしき者なれば、年月經ざる中に、元常が密謀をも聞くばかりに愛せらる。岡今は時を得たりと、直家に日を定めて矢津の砦の軍兵を、龍の口の本丸、北の川向に出され、小舟を隱し置かれよ、と告げやりて相闘しけり。本丸の北の方に、閑所のありけるに、元常軍評定する所なり。其夜も元常は、此所の欄干に倚り居たるを、岡つとよりて、引き組みて下に轉び落つる。かれて思ひ設けたる事なれば、落ち著く所にて一刀刺し、其身も打ち損じければ、元常が首をとり、隱し置きたる小舟に乘り、遁れ得て、直家のもとに歸る。元常死して後、龍の口の城落ちたりければ、直家軍兵を入れかへて守らせけり。

又一説に、最所元常浮田家に從はざりしかば、直家與太郎基家に、長船紀

伊守延原土佐守を添へて攻めさせらる。元常城を出で、山の麓段の原に陣して竹田河原にて軍せしに、勇氣當り難く、基家も岡山に引き歸せり。城は險阻に據りたり、容易く攻め難しと、直家家臣どもと相謀るに長船紀伊守修理は、武略餘りあれど、色を好む病あり。あはれ一手段して城に入り、計り討たばや、されども、才智賢き健か者ならでは、叶ひ難しとて、頻に岡清三郎を見やりければ、直家兎角物云はで止みけり。さて程經て、直家清三郎を捕へて、押し籠め置き、老臣どもに、清三郎は不義の振舞あり。首を切れと怒られしに、皆彼れ幼少より奉公し、今年十六歳に及びて、一度も過なしと、諫むれども聞き入れず、奥に入りさまに、岡豐前を招き、清三郎を密に落せよ。清三郎には、我れ能く謀を云ひ聞かせたりと云ひしかば、豐前斯く計ひたり。其の明けの日、押し籠めたる牢をあくれば、清三郎は見えざりければ、驚きたる計なり。豐前は清三

郎を盗み出し、龍の口の向ひ枚石原に、由縁の僧の草庵を結びて居たりしに、頼みて隠し置きけり。ある時修理城下の流に漁猟せしが、尺八の聲聞えたり。人に見せしむるに、清三郎が有様を告ぐれば、剣術の師加藤十蔵、小性の早川左門、彼れ是れ六七人、川向に渡りて其様を見るに、容貌勝れて美しかりけるが、見る人ありと、尺八を納めて、庵の中に入らんとしけるを、引留めて問ひけるに、宇喜多家の士岡清三郎と申す者なるが、無實の罪によりて、已に誅せらるべきを、家老憐れみて、爰に隠し置きたるにて候、洞簫は直家の猶子基家堪能にて、少し習ひて候ふなりと申す。其有様只人ならず覺えければ、元常打ち具して龍口に歸りけり。人々敵方の者なり、用心あるべしと諫めけれども、直家さへ恐るゝに足らず、たとへ間者たりとも、我れ又彼れに付て謀をなさんとて、岡山に問者をやりて、事のやうを聞くに、清三郎が詞に違はざりければ、元常疑ふ心もなく、清三郎を龍

愛し、軍場に怠り、城上の北の樓に、酔臥する事度々なり。赤坂郡和田の城主和田伊織これを聞き、龍の口に來りて、諫むれども聞き入れず。かくて炎熱の比、北樓の上に酒宴して、日頃好める尺八を、代る〳〵吹きて、清三郎が膝を枕にして睡りたり。清三郎能き隙なれば、首取らん事いと易しと思ひけるが、いかさま過つる比より、淺からず龍愛したる人を、空しく討たんは人情に非ず。如何せんと躊躇ひしが、いや〳〵仰せを奉りて、身をすてゝ此城中に計り入るからは、時を得て私の情にかへんも、志にあらずと思ひ返し、元常の脇指を取りて引き寄せ、首を打ち落し、袴を脱ぎて首を包み、九折なる道を、北の麓に落ち行きしに、早川左門來りて見るに、元常の尸は朱に染りたり。大に驚きて、清三郎こそ殿を斬りたれと呼はりて、追ひ懸けて麓に下りけるが、清三郎は小舟のありけるに乗らんとせしに、左門追ひ着きたり。清三郎振り返りて、切り合

ひけるが、早川が眉間を切つて斬り伏せたり。夫より追々馳せ來りけれども、早や舟に棹さして、向の岸にあがりぬ。城兵は上の瀬、地藏岩の邊に繋ぎたる小舟に、人數多取り乘つて、押せどもさせども動かず、其内に清三郎、岡山に易々と遁れ歸りけり。直家は清三郎が若年にて、事能く遂げん事叶ひ難かるべし。生きて歸らん事は思ひも寄らず。あはれ由なき謀をしつる物哉、と悔まれけるに、豐前清三郎を打ち連れて、元常が首を出す。直家大に驚き、且つ悅び且つ怪しみて、其功を賞せらるゝ事並々ならず。これより岡剛介といへり。龍口には人々齒を嚙みて怒れども詮方なし。和田の伊織を大將として、逆寄に岡山に打つてや出んといへども、和田も自らの城を棄てゝ、無謀の軍すべきに非ず、皆呆れたるばかりなり。直家其勢を料りて、龍口に押し寄せたれば、城主を失ひたる者共、心々になりて、防戰の術なく、多くは落ち失せければ、元常が賴み切つたる

山口與市も詮方なく、士卒と共に落ちんも面目なしとて、三の廓にて腹切りて死しければ、即ち城落ちける間直家火をかけて、燒き拂ひけり。和田にも是れに、士卒力を失ひ、落ち散りければ、金川の城の松田が一族と一つにならんとて、和田の城も一時に陷りけり。又上道郡中島落城と、龍の口落城と、一日の事なり。直家龍口より引き返す時、中島の城を取り卷かれしに、城主中島大炊、無勢にて防ぐ事能はず。榎の大木の洞のありしに隱れたりしを、探し出して遂に討たれたり。中島が子孫今にあり。又其時の模、今にありて、周圍三丈ばかりなり。

遠藤喜三郎三村家親を打つ事 幷 備前明禪寺合戰の事

浮田直家近國を攻め取らんとす。毛利元就備中松山の城主三村紀伊守家親に下知して、美作の三星の城を攻めさせらる。直家三村に戰ひなば、隣敵其隙に

ひけるが、早川が眉間を切つて斬り伏せたり。夫より追々馳せ來りけれども、早や舟に棹さして、向の岸にあがりぬ。城兵は上の瀬、地藏岩の邊に繋ぎたる小舟に、人數多取り乘つて、押せどもさせども動かず、其内に清三郎、岡山に易々と遁れ歸りけり。直家は清三郎が若年にて、事能く遂げん事叶ひ難かるべし。生きて歸らん事は思ひも寄らず。あはれ出なき謀をしつる物哉、と悔まれけるに、豐前清三郎を打ち連れて、元常が首を出す。直家大に驚き、且つ悦び且つ怪しみて、其功を賞せらるゝ事並々ならず。これより岡剛介といへり。龍口には人々齒を嚙みて怒れども詮方なし。和田の伊織を大將として、逆寄に岡山に打つてや出んといへども、和田も自らの城を棄てゝ、無謀の軍すべきに非ず、皆呆れたるばかりなり。直家其勢を料りて、龍口に押し寄せたれば、城主を失ひたる者共、心々になりて、防戰の術なく、多くは落ち失せければ、元常が賴み切つたる

山口與市も詮方なく、士卒と共に落ちんも面目なしとて、三の郭にて腹切りて死しければ、即ち城落ちける間直家火をかけて、燒き拂ひけり。和田にも是れに、士卒力を失ひ、落ち散りければ、金川の城の松田が一族と一つにならんとて、和田の城も一時に陷りけり。又上道郡中島落城と、龍の口落城と、一日の事なり。直家龍口より引き返す時、中島の城を取り卷かれしに、城主中島大炊、無勢にて防ぐ事能はず。榎の大木の洞のありしに隱れたりしを、探し出して遂に討たれたり。中島が子孫今にあり。又其時の榎、今にありて、周圍三丈ばかりなり。

遠藤喜三郎三村家親を打つ事 井 備前明禪寺合戰の事

浮田直家近國を攻め取らんとす。毛利元就備中松山の城主三村紀伊守家親に下知して、美作の三星の城を攻めさせらる。直家三村に戰ひなば、隣敵其隙に

寄せ來るべし。謀を以て三村を討たばやと思ひ、遠藤喜三郎といふ新參の士を近付け、

遠藤はもと阿波の人なりとぞ。此時備前國津高郡加茂といふ所に居たりとも云へり。

汝は三村成羽にありける時、汝も成羽にありて、能く見知りたらむ。美作に忍び行き、三村が城に入りて、討たん事を賴む所なりと云ひければ、遠藤三村は容易く討たるべき者に非ず、されどもかゝる仰せを承る事面目なり、忍び入りてこそ見候はめとて、作州に赴きけり、弟の修理も、兄は今度萬死に一生もあるべからず。同じ枕に死なんとて、是れも打ち連れけり。永祿六年三村は、穗村の興禪寺といふ山寺に陣してありけるを、遠藤兄弟夜に紛れ、後の竹林の中より忍び入り、緣の下に隱れ、夜更けて密に障子の外に立ち寄り、內を差し覗くに、家親柱に倚り懸り居たり。天の與ふる所よと、鐵炮を差し當て、

火蓋を切れば、火繩の火消ぬけり。喜三郎呆れて居しに、修理つと外に出で、夜廻りの人に紛れ、簿の傍を通りさまに、羽折の裔に火をつけ、高聲に番の者どもを戒め、もとの所に行てき、兄が火繩に火を移せば、やがて三村が胸元を打ち貫きたり。其鉛子の跡、今に柱にありとかや。此時三村が傍に、三村孫兵衛親成といふ老功の兵ありけるが、ちつとも騷がず、人々靜まり候へとて、屏風を家親が前に立て、外の體を聞くに靜かなり。扨は夜討にては無かりきとて、物見を出すに、三星より打つて出でたる氣色もなし。親成下知して、今夜備中に引き返すべしとて、松山に歸りて後、家親が死したる事を、人皆聞きたりけり、親成なかりせば、大に騷いで敗北すべきにと、人皆云ひ合へり。遠藤はもとの竹林に隱れ居りしが、三村は死したりと覺ゆるに、餘りに靜かなるは、心得ぬ事と思ひながら、忍びて出でけるに、鐵炮を忘れたり。後に狼狽へたりと、譏られんも口惜しくて、又立ち歸り、忍び行き、鐵炮を取りて、兄

弟共に備前に歸りけり。後に一萬石與へて、宇垣の城に居らしめ、修理も中村正崎の城を預かりけり。家親が嫡子は、備中猿掛の城にあり、莊野元祐といふ。二男は三寸彥理亮元親といひて、備中松山の城にあり。父の吊軍せんとて、先づ謀を廻し、備前上道郡澤田の西、妙禪寺の砦を攻め取るならば、直家沼の城を出て攻むべきなり。其時後詰めして軍すべしとて、選りたる軍兵四百人、夜に紛れ、三棹山より押し寄せ、妙禪寺の砦を攻め取り、藥師寺彌五郎、根矢與七郎等を入れ置きぬ。果して直家妙禪寺の砦を攻めたりければ、間に入りたる者、松山に馳せ歸りて、かくと告げければ、三村願ふ所の幸なりとて、一族相集り、其兵二萬餘り、備前辛川の驛にて兵を分ち、一手は元祐大將にて、七千餘を率ゐて、萬成山の麓を廻り、春日明神の祠の前より旭川を渡り、旭山の下より艮に向ひて、三棹山へ懸かり、妙禪寺の後卷とす。一手は石川左衛門尉、五千許にて首村ひやけばなに懸かり、岡山の北を

過ぎ、原尾島村に出で、直家が旗本へ押し寄せ、一時に勝負せんとなり。三村元親は一萬人を率ゐて、津島村より國府市場を過ぎて、釣のわたりを越し、四御神村の山を越え沼の城を攻め取るべしと、謀を定めて押し入りけり。直家は斯くとも知らず、沼の城を出で、古津の西宍甘に陣して居ける處に、萬成山の砦より、敵三方に分れて、押し寄すると、告げ來る。前には敵死地を守りて城に籠りたり。又大軍攻め來ると聞えければ、いろめき騷ぎけるに、直家少しもひるまず嘲笑ひ、此城だに攻め破らば、敵は幾萬もあれ、蹴散らして棄つべき物をと云ひも敢へず、冑を取つて着、結びたる緒の端を、刀を抽いて切りて棄て、馬に打ち乘り、二十餘町の田の中を、眞一文字に妙禪寺の砦に駈け向ひ、先陣の者共おくれて砦を攻め取り得ず。今旗本にて、無二無三に、のれや者共と下知するに力を得て、先陣の軍兵喚き叫んで攻めければ、思ひ切りたる三村が士ども、引き組み〳〵討死しければ、直家城に火を掛けさせ、三棹山に打

ち上り、山上より遙に敵を見下して扣へたり。元祐は春日の宮の前をわたり、玉井宮の前を過ぎ、國富村近く進みける處に、妙禪寺にて討ち洩らされたる者ども落ち來りて、敵早や三棹山にとり上りぬと云へば、騷ぎ立ちたる所に、戸川肥後守、花房助兵衛、岡越前守、長船紀伊守等、鐵砲を打ち掛け進み來る。備中の兵亂れ立ちて、國富より德與寺の間にて、討たるゝ者數を知らず。元祐五十騎ばかり左右に立て勝ち誇りたる敵に向ひ、延原土佐守が兵を追つ立て、浮田左京が朱の四半に、兒の字の馬標を目懸け、直家の旗本なりとや思ひけん、馳せ入りて討死しける、首をば能勢修理取りたりけり。元親は四御神村矢津の砦近く進む處に、妙禪寺の煙天を焦して燃え昇るを見て、すはや城は落ちけるよと犇き合へり。石川も相圖の皆違ひぬる上は、元親と一つになりて、軍せんと云ふ所に、浮田元家丸に兒の字付けたる旗、山風に吹き靡けさせ、一足も退くなと呼はりて押し來り、原尾島を北南へ、數度追つ返しつ相戰ふ。備中の

兵うち崩れして、石川も竹田村に引き入らんと、川上へ人數を纏む。直家兵を押しおろし、高屋村まで進まれければ、石川は八幡村にて取つて返し、元家を目懸け二三度火を散らして相戰ふ。浮田の兵數多討たれ、雄町村を東へさして敗北す。元親は思ふ仇を討ち得ざるのみならず、云ひ甲斐なく兩陣の軍破れ、兄も討死しける事口惜しく、馬の頭を南に引き向け、血眼になりて眞先駈け只死れやと罵りて、面も振らず戰ひければ、明石飛驒守岡信濃守、此鋒に破られてければ、元親軍は勝ちたるぞとて、槍を提げ、逃ぐる敵を追立つる處に、國富村にて軍せし長船等、横間に駈け來り、中に取り込めければ、元親敵の中に駈け入らんとせしを、士ども轡に取り付き、今日ながらへ、再び兵を起し、仇を報ゆる時あるべしと、强ひて諫めて引返す。猶追ひ懸くれば取つて返し、相支へて釣の渡りを越え引き取りけり。かくて彌直家を討ちて仇を報ゆべしと、志深くせし處に、光源院殿(義輝)を三好弑して、靈陽院殿(義照)

沒落し給ひ、織田信長を頼み給へども、京には信長村井長門を守護とし、靈陽院殿志伸ぶべきに非ず。備後の鞆に落ち行き、毛利家を便られしかば、信長元親が許へ使を以て、此度將軍に與せず、西國の通路を塞ぎ、織田家に忠を致さば、やがて信長帥を出し、中國を討ち平げ、備中備後を元親に與ふべしと、誓紙を添へて云ひ送られしかば、元親一族を集め、將軍家に從ひたりとも、さばかりの大功もあるべからず。殊に浮田家將軍に隨ふならば、兼て思ひ設けたる仇を、報ゆる事も叶ひ難かるべし。信長の望む所に隨ひ、將軍を討ち參らせ、織田家の力を頼み、浮田を討ち滅すべし、と謀りければ、皆尤もと、一同す。三村孫兵衛親成、同孫太郎義兼父子は、父の仇を報ゆるに、他人の力を借る事や候ふべき。弓箭取る躬は、忠と孝との二つより外なし。君君たらずといへども、臣は臣たらずば有るべからずとこそ承り候へ。信長計りて語らひて候ふを、眞實なりと欺かれ、虎狼の如く世に稱する信長に從ひて、將軍を討ち參らせ、

毛利家を敵になさん事、惡逆不義の名遁るべからず。信長將軍の威をかりて、五畿内を討ち隨へ、後には將軍を侮り、都を追ひ出すに及ぶは、惡逆に候はずや。かゝる人を頼み給はん事、あるべくもなしと諫めけれども、元親を始め、皆當家武運を開くべき時なるに、衆議に背く事よと、人々怒りければ、三村父子は詮方なく成羽に歸りぬ。常山(備前兒島郡)の城主三村土野介高德(元親の從弟にて、高德が妻は元親の妹なり。)親成を棄て置きたらんには、必ず將軍へ告げ知らせ、逆寄せすべしとて、信長の援兵を乞ひて手始に成羽を攻め落すべしと云ひければ、此義に同じて、信長の許に使を遣し、成羽にはたらくべき設けをなせり。親成は如何すべきと、案じ煩ひたる所に、靈陽院殿より、偏に頼み思し召す由聞えしかば、さらば兵を賜はり候ひなば。松山を攻め申すべしと申しけり、かくて安藝備後の兵、七千三百餘さし向けられしかば、天正三年五月廿四日、松山へ攻め寄する。松山には思ひも寄らず、城遂に陷り、元親も城を

落ち去りて、阿部山にありけるを、同廿九日討ち取りて、靈陽院殿へ注進す。

一說、元親城を攻め落されし時、升彌助といふ士、元親の後を慕ひて、安部山にて追ひ付き、元親と名乘り、城に歸りて討死せん。其間に爰を落ちのびて、運を開き給へといへども、元親聞かず。とても遁れぬ所なり。使者を乞ひて來れ、自害すべしと云はれしに、再三諫め爭ひしかども、是非共にと云ひしかば、泣く〳〵今生の暇乞し、形見を取りて、玉村に有りし元親の母に送り屆け、さて夫れより城に至り、元親が匿れたる所を知りて、告げ來るにやと、門を開きければ、內に入り、此城を枕にせん爲に、來れる由名乘りて、散々に戰ひ、あまた切り伏せて討死しけり。元親は使者を待たれしに、音づれもなければ、松運寺の道に出て、鄕民を賴み、城中に送り、使者を待ち懸けて自殺せられしと云へり。

夫れより、兒島の常山を攻めんとて、毛利家の大將小早川伊豆守光重に、三

村父子相加はり、成羽にて勢揃して、六月四日山村兒島郡に陣し、二手に分れて先陣溝兵部宗勝用吉より、宇藤木にかゝりて押し寄せ、六日の朝大手の木戸口へ攻め寄せたり。高德は後卷と賴むべき味方なく、殊に累年毛利家に弓矢をとりし、三村家の謀主なれば、遁れんと思はゞこそとて、嫡子源五郎高秀と共に、鐵砲を打ち出す。高德の弟小七郎高重は、箭次ぎ早やに弓を射出す。寄手此三人に防がれて、手負ふ者數多あり。七日の曉に及びて、城中最後の酒宴の聲、城外に聞えければ、我れ劣らじと攻め寄せたり。高德の母、我れ先づ、さき立たんとて、柱に刀の柄を結び付け、走り懸かり貫かれて死しぬ。高秀十五歲、御後に殘らんは、心懸りならんと云ひて、腹を切りぬ。二男八つに成りしを、引き寄せて刺し殺しぬ。高德の妹なりしが、藝州鼻高山の城主は、高德の弟なれば、そこに落ち行かれよと云へども、思ひも寄らぬ事よ、といひ捨て、母の貫かれたる刀にて、乳の邊を刺し通し、同じ枕に臥したりけり。高德の妻は

世三歳なるが、弓箭取の女房と成りて、最期に空しく死する事や有る。三村が一族、今を限りに一軍をせんとて、紅の薄衣を、甲の上に著て、薙刀おつ取りて出でけるを、局の女ども推し留むれば、早や疾く立ち忍びて命を全うせよ、敵一人をも討ち取らずして、空しく死するやうやあるとて、ふり切つて走り出づれば、此上は誰れか殘らんとて、立てたる長柄の槍を取り、突いて出る。高德の恩顧の士八十三人、今日を限りに切つて出て、浦が七百計り扣へたる眞中に、死狂ひに戰ひければ、討たるゝ者多し。されども小勢にて、戰ひ疲れければ、高德の妻兵部を呼び懸け、腰なる刀を拔き出し、是れは國平が造れるにて候。わが家重代の物なり。父に添ひ申す心にて、身を離さず候ふが、武名聞えある兵部殿に、參らするなりと云ひて、城に歸り自害す。高德も腹を切れば、弟の高重介錯して、其身も腹切りぬ。寄手亂れて首共を取り、鞆の津に送りけり。常山の山上、今に其城跡あり。

上杉謙信小田原へ攻め入られし事附上京の事

永祿三年、謙信八千の師を、相州小田原に出さる。關東の諸將、皆々靡き從ひて、十五萬に及べり、旗本は高麗寺山の麓に陣し、先陣太田三樂は、小磯に陣す、北條の兵戰はずして、城に引き入れければ、蓮池まで攻め入り、それより鎌倉に赴き、鶴岡の八幡宮に詣でらる。上杉憲政の長臣等も皆群參す。成田長安譬固の者と爭論の事あり。誅罰に及ぶべきといへども、これを宥めらる。成田謙信の怒を恐れ、病して出ず。(これを甲陽軍鑑に、謙信成田を討つと記せしは非なり。) 同年六月謙信上京せらる。六月廿八日京都に至り、七月七日光源院殿(義輝)に謁し、吉光の太刀黃金三十枚を獻じけり。光源院殿より管領の任、又諱の字を賜はり、兄弟の義に準ぜらるゝの命を承り、越後に歸られけり。

謙信相州に攻め入る時、京都より近衛關白前久公を進められ、管領の職を承る事、此時より始まるとも云へり。又鶴岡に參詣し、管領の職に任ず。近衛關白前久公下向ありて、光源院殿の公方より、大和兵部少輔使たりとも云へり、孰れか是なるを知らず。又謙信上京の事、三千許りの人數にて、越後を出られしと云へり。光源院殿に謁して後、京、堺、住吉所々遊覽して、國に歸るに及びて、光源院殿に三好松永謀叛の相現はれ見えて候、御書を賜はり候ふならば、馳せ上り誅罰すべき由、密に申されしを、三好松永も察しけるや、深く恐れけり。程なく永祿七年、三好長慶河内の若江にて病死しけるを、松永かくして翌年の春に至りて、公方を聞し召し、越後へ御書を賜はりける所に。松永此れをや泄れ聞きけん、急ぎ光源院殿を殺しけると云へり。

新發田治長の事

謙信小田原の蓮池まで攻め入り、明日は鎌倉に赴くべしとて、軍評定ありし時、新發田因幡守治長、其比十五歳なりしが進み出で、斯かる手配りならば、一定味方敗北すべしと申す。謙信怒りて、舌の軟かなるまゝに、物な云ひそと云はれしかば、治長居直り、謹んで、今日より君臣の義を、絶たせたまはり候ひなば、小田原に馳せ參り、北條家の先陣して、君を追ひ討ち參らすべし。酒匂川の此方にては、容易く討ち取り奉らん物をと申す。謙信其時色を軟げ、天晴剛の者よ、神妙にも申したる哉。明日の後殿をせよと命ぜられける。治長軍立て云々すべきとて、やがて事なく小田原を引き取りたり。治長後景勝の世に及びて、二心ありければ、景勝これを討たるゝに、新發田五十野兩城を守りて、三年を經て城落ちければ、治長染月毛といふ馬に乘り、三尺五寸あ

りける光重の刀を抽き持ちて、大軍の中に駈け入り討死しけり。此馬は極めて色白き尾髪なりしに、茜の汁を刷毛にて染めたれば、年月を累れて後、眞紅の糸を亂し懸けたるに似たりしとかや。非筒女之助、此馬を得て乘りしと云へり。

又景勝治長を攻めらるゝ時、治長が士に、波多野忠左衛門といふ剛力の者あり、景勝の寄せらるゝ道二筋の中に、近き方を三淵というて、一騎打の嶮阻ありけるに、待て景勝の打ち通られん時、むずと組みて刺し殺さんと思ひ、三淵の岩穴に隱れ居たりける。景勝既に討ち向ふ時、皆口々に、近き方より寄せ給へと申す。景勝聞かず。兵法に迂を以て直とすといふ事あり。危き道に不意の患ありといひて、三淵にかゝらず。道を廻りて進まれしかば、波多野が仕度空しくなりけり。

信濃國川中島合戰の事

永祿四年七月、甲州に謙信より入れ置かれし間者ども、越後に歸りて、信州の士二心ある者數多ありしを、五月上旬信玄川中島に赴きて、死罪に行はれ、是れによりて疑ひを生ずる者多し。又和利が嶽の軍に、士卒多く手負ひ討死しける由を告げけるを、謙信聞きて三軍の禍は、狐疑より生ずるといへり、是れ一つ。勞れたるに乘ずべき、是二つ。八月に至りて、師を川中島に出すべきとて、士大將を盡く呼びあつめ、各謀を問はるゝに、存ずる旨を、書き記して出しけるを、擇び分ちて、上中下の三等とし、其下策を用ふべし、といはれしかば、此れは如何候ふべき、と怪しみければ、謙信の曰く、上策は既に敵の察する處にて、我れを待つべき謀、怠らざる由を聞き、待ち設けたる所へ、攻め入らんに如何でか勝つべき。中策は數年評議せし所なり。下策を用ひて、貝津の城を踏み越え、西條山に陣し、姑く敵の後卷を待たん。是れ兵を死地に陷るるに非ずや。信玄押し寄せば、其時勝負を一時に決すべし。若し信玄貝津の城

に入らば、圍み攻めん。又信玄川中島に陣どりて、吾が歸路を塞ぐならば、吾が軍雨の宮の渡りを渉らず。直に貝津の城に向ひて、攻め破らんに信玄必ず救ひ來るべし。その時又一戰して、叶はずば討死すべし。是れ下策を用ふる謂れなりとて、八月廿四日西條山に押し入り陣したりければ、信玄後卷して暫く對陣せられしが、廣瀬のわたりを越えて、貝津の城に入りたりけり。かくて九月九日の晩、謙信士大將を集め、明日信玄必ず打ち出て戰ふべきよ。今夜雨の宮のわたりを逆寄せして、其不意を擊つべし。用意せよとて、寅の刻に至りて、川中島に兵を押し出す。先陣は柿崎和泉、後陣は甘粕備後なり。果して十日の卯の刻ばかりに、信玄二萬餘の兵を率ゐ、筑摩川に打つて出で、善光寺の要路に待たれし處に、謙信軍を進めて、一手ぎりの合戰を始む。謙信旗本眞黑になりて切り懸かり、信玄の旗本を押し崩す。甲斐の兵討るゝ者數を知らず。かゝる所に、西條山の甲州の軍兵、一騎がけに馳せ來るを見て、謙信兵を纏め、勝

を全くせられたり。甘粕備後、後陣の兵を進むるを見て、信玄の旗本踏み留まりたるが、又亂れ立ちて、廣瀬のわたりに引き退く。甘粕是れに因りて、西の川邊に陣する事、三日にして引き取れり。

是れ謙信實記に據りて記す所なり。川中島の戰、異說多く分明ならず。一說に、天文廿三年八月十八日、川中島にて戰あり。謙信旗本半町計敗北する處に、宇佐美駿河守定行横あひに懸り、信玄の兵大に亂れ、御幣川へ追ひ入られ討たるゝ者多し。信玄は川の中に馬を立てたる處に、謙信綠の曇子にて包みたる肩衣に籠手をさし、白き手拭を持て頭を包み、三尺ばかりの刀を抽き持ち、虎の荒れたる如くなる鹿毛の馬に打ち乘り、信玄は何處に在りや、と呼はる。原大隅、信玄何事に爰にあるべきや、狼狽者よと罵り、槍にて突きけれ共、突き外す。謙信川へ馬を乘り込み、信玄に駈け寄せ、三刀まで斬られしに、信玄持ちたる軍配團扇も切り折られ、手負ひて

既に危かりしに、原大隅、萩原彌右衛門槍を取り延べ、疊み掛けて、謙信をたゝきけるに、馬の三疋に當り、馬川の深みに飛び入りける。其間に信玄の馬副の者ども、信玄の馬を川岸に引き揚げて、物別れしたりとなり。宇佐美駿河守、謙信より賜はりたる感狀も、天文二十三年八月十八日、川中島に於いて、横槍を以て、信玄の旗本を、突き崩したる由載せられたり。弘治二年三月廿五日にも、川中島にて軍あり。謙信筑摩川を渉りて、夜軍に懸かられしかば、板垣駿河、一條六郎、諸角豐後、初鹿源五郎、輪形月織部、山本勘介をはじめとして、討死する者多し。甲斐の先陣上ノ山より懸かり來り、前後に逼りける故、謙信川を渉りて引き取られけり。此時に宇佐美駿河守、先陣して功あり。又永祿四年九月十日、川中島の戰に、武田の先陣敗北す。信玄の旗本を以て盛り返し、長尾政景等、陣を亂して懸かりける所に、渡邊越中一陣、衆を越えて槍を入れ、遂に甲斐の軍敗北せし

事、皆謙信家臣に賜ひし、感狀傳はれり。甲陽軍鑑、川中島數度の軍を附會して、一度となすなるべし。又一說に、永祿四年九月十日の戰の事は、謙信の家に云ひ傳へたる事なしと云へり。然れども謙信の感狀を傳へて、謙信實記と符合するに似たれば、九月十日戰ありし事疑ふべからず。又上杉義春入道入菴、京都に閑居してありしが、徒然の餘り、甲陽軍鑑を讀ませて聞かれしに、事實謬れる事のみなり。高坂が死後の事を多く書き載せ、川越の軍も、年月大に違ひ、人の姓名も、以ての外謬れる事多く、又なき人の名を造り拵へたるもあり。謙信の世の事は、予能く知りたるに、此の如く謬れるなれば、此書更に信ずるに足らずとて、復讀まする事なかりしと云へり。今を以て是れを視るに、甲陽軍鑑過半は贋物なり。又按ずるに、今世に專ら行はるゝ書に、川中島五戰記と云へるあり。此書は川中島の戰五度なりと記せり。然れども其中に疑ふべき事なきに非ず。これも

又正しき書とも信ぜられず。謙信鶴岡に詣でゝ、忍の成田を打ちたりしかば、關東の諸將心々に離散し、小荷駄を敵に奪はれ、僅に謙信遁れ得て、越後に歸りしと、甲陽軍鑑に記したるも心得られず。關東の諸將靡き從はずば、如何で其年京に上る事のあるべき。是れ事情時勢の顯然たる事にして、甲陽軍鑑の虚妄論を俟たず。

謙信軍中に青竹を持たれし事

謙信は、長さのみ高からず。左の脚に氣腫ありて、歩む時足を曳く如く見得しとなり。物の具する事は尠く、黑き木綿の胴服を着、鐵にて造りたる小き車笠を被り、麈とる事も尠く、青竹を三尺ばかりにして、杖の如く提げ持ちて、士卒を下知せられけり。梁の韋叡が竹如意の遺風なりとぞ。

北魏の兵、鍾離城を攻めし時、梁より韋叡を以て後援させられけり。北魏の將楊大眼、勇將にて數萬騎を率ゐて戦ひしに、叡は素木にて造りし輿に乘り、白角の如意を執りて、軍兵を下知し、切り勝ちたる事史に見えたり。

謙信松山城後卷の事

永祿五年三月、北條氏康父子、武田信玄父子、數萬の兵を以て、武州松山の城を圍まるゝと聞き、謙信八千の兵をもて、後卷せられしが、十五日厩橋に着陣あれば、城落ちけると聞えければ、されば是れより、山の根の城へ押し寄せ打ち破るべし。敵後詰めするならば、北條武田父子、四將の大軍に打ち合せて、軍せん事尤も望む所なれと、云ふより早く刀根川を打ち渡り、架けたる船橋を切り流させ、山の根の城に押し寄せ、忽ち攻め落し、小田助三郎を始めとして、皆撫で切りにしてけり。かくて使を、四將の陣に遣りて、松山の城に向はれ候

ふ由を承り、出向ひ候ふに、城早く攻め取られ、軍仕る事なくて、弓箭の禮義に背きて候、唯今山の根の城を攻め候ふほどに、後卷や仕り候へと云ひ送られしかば、氏康懸かりて軍せんとす。信玄の曰く、今勝ちたりとも、謙信には四人して勝ちたりと、人に誹られん事口惜しきとて、强ひて留めてさて止みけり、信玄實は然らず。日比謙信の勇氣倍々にても戰ひ難きに、松山の城落ちて、怒を含みたれば、其鋒に對ひがたく、虎を恐るゝが如くなりし故とぞ。

又一説に、此時信玄兵を進め、太鼓を鳴らし、軍威殷然たり。越後の軍兵も物の具し、早や打ち向はんとせしを、謙信いや〳〵信玄かゝり來るに非ず、引き取らん爲なり。馬の鞍をおろし、甲冑を脱いで、休息すべしと云はれしが、果して信玄引き返されたりと云へり。

東照宮一向宗の黨と厚木坂にて御軍ありし事

附 蜂谷半之丞が事

永祿六年十一月十五日、一向宗の黨と、厚木坂にて軍ありし時、一揆より蜂谷半之丞渡邊源藏、眞先に進み、味方には上村庄右衞門、黑田半平槍を合せ、渡邊黑田を突き倒したるに、味方競ひ懸かりて追つ立つれば、蜂谷も渡邊も引き退て、細蹊に懸かるを、水野藤十郎、蜂谷如何に遁すまじと詞をかくれば、蜂谷踏み止まり、莞爾と笑ひて、藤十郎如何でか我れ等に敵すべき、いざ參らんとて、槍を地に突き立てゝ、手に唾きを吐きかけ、さらばと云ふ。水野も踏み留めて近付き得ず。蜂谷されば、こそとて、又靜かに引き退く。蜂谷が槍は、三間柄の中を少し太くして、長吉が鍛ひたる双なるが、勝れて物を貫きけるといへり。東照宮御馬を乘り出され、蜂谷め返せと、御詞を懸けらるれば、

跡をも見ずして逃ぐる。松平金助餘すまじと追ひつむれば、蜂谷踏み留り、殿なればこそ逃げたれ、御身にはひくまじい、と云うて取って返し、金助を五六度も突き退けたりしが、蜂谷槍を投げ突きにして、金助を突き倒す。東照宮蜂谷奴とて、又御馬を乗りつけさせ給へば、蜂谷引き返し、逃げ退きけるとぞ。蜂谷其後は先立ちて、一向宗の黨を離れて降參し、それより人々願ひ申て、終に一向宗の黨の者ども、罪を御赦し有てけり。其後二連木の合戰に、本多平八郎、牧宗次郎、槍を合せけるに、蜂谷少しく遲れたりしが、蜂谷早や疾く鎗は合せたるに、如何にと云ふ者ありしを、半之丞聞きて、他人槍をしたらんに、我れは切合ふまでよ、と云ひ捨てゝ、刀を提げて、敵の中へ飛び込んで、二人薙ぎ伏せたるに、河井正德といふ者、鐵砲を構へたる所に走りかゝる。正德隱れなき手練にて打ちたるに、痛手なりしに起きあがりて、其處をば引き取りたれども、蜂谷遂に死しけるとぞ。又この正德、ある時忙しき場にて、後殿しける

時、後より其手負ひ打ち取れと呼ばる。これは正德生來跛なりし故、手負ひたると思ひて、斯く云ひたるなり。其時踏み留りて、弓箭神に誓ひて、手負にてはなし。生得の跛ぞと云ひけるより、今川家に賞めて、正德と云ひけるとなり。又蜂谷が痛手負ひたると、其老母の聞きて、いかに首尾のありつるぞと問ふ。其樣子これ〳〵なりと答ふれば、嬉しや士の戰場に出で、矢に當るは常の事なり。若し手負樣のあしかりせば、死したりとも、冥途に面目なかるべし、と云ひけるとぞ。戰國の時、婦人の身も弓箭とる家に生まれたるは、志す所大に異なるもの、想ひみつべき事なり。

東照宮針崎合戰の事

永祿七年正月十六日、三河一向宗の黨と針崎にて終日の競合あり。中根喜藏と名のりて、一番槍を合はす。一揆の相手は、渡邊半之丞なりしが、槍を棄

て刀を抜いて飛び込んだり。中根も刀を抜き、互に手負ひ相引にしける處に、鵜殿十郎三郎、渡邊を目がけ追ひ懸けたるを、渡邊が父源五左衞門援け來て、鵜殿を突き伏せたるを、東照宮御覽じて、御手づから槍を提げ給ひ、槍ぐみ給ひて突き伏せ給ふ。微傷なりしかば、引き退くを見て、石川十郎左衞門、渡邊源五左衞門競ひ懸かりて、東照宮に向ひ奉る。內藤甚市弓取り直し、源五左衞門が股を射貫きければ、半之丞父を掻き負ひて引き退き、それより物別れせり。內藤は渡邊が甥なりけれども、御急難の時に當りける故、射倒したるとなり。

向井與左衞門かへり感狀の事

謙信信玄と、和平を結ばんとせられし時、長遠寺の僧を使にせらる。此僧は遊說の人なり。謙信彼の僧に、甲斐の士に、向井與左衞門といふ者やあると問はるゝに、これありと申す。又創の痕やあると問はるゝに、面に刀の疵ありと

申す。謙信の曰く、川中島の戰に名のりかけて、我れを後より突き通す處を、ふり顧りて一刀斬りたりしぞかし。よも助からじと思ひつるに、長らへたるよなとて、萌黃の胴肩衣に、槍の跡あるを取り出し、書簡を添へて、向井に送られけり。此を世にかへり感狀といふ。其書中に、川中島の事を載せられたりと云へり。

卷之二 終

卷之三

中島元行が毋備中經山城を守る事

尼子伊豫守晴久、尼子刑部、大賀駿河に兵一萬を添へて、備中經山の城を攻めさせらる。此城は中島加賀守が子、大炊助元行が守る處なり。元行僅に二百ばかりの兵なれども、些とも恐れず。頓宮次郎左衛門、鷲見九郎二郎に、百姓ばら二百人添へて、寺屋敷といふ地に伏せ置き、阿部左衛門二郎、鷲見五兵衛は、鬼ケ城といふ處に隠し置きけり。敵侮りて押し寄する時、門を開きて打つて出で、相圖の貝を吹けば、鬼ケ城の伏兵後より廻り、又頓宮等、百姓に帋旗を立てさせ、竹槍を持たせ、鬨の聲をあぐろ。尼子が軍兵共前後に敵有りとて、助け合はんとすれども、道細く谷深くなだれ落ちて亂れけり。されども攻具を設

け取り圍みしに、元行が母、物の具の上に羽折を着、刀を横たへ、女房二十人ばかり相具し、元行本丸にある時は、母出丸を巡り、元行出丸を巡れば、母本丸を守りて、士卒の怠りを戒む。或夜風雨甚だしかりければ、元行百人ばかりにて夜討ちに出で、半ば道に伏せ置きたり。かくて亂れ入り、閧の聲をあげ火をかけて、靜かに引きて返る處に、敵追ひ來れば思ひも寄らぬ徑の傍より、伏兵どつと起りて、敵三百餘討ち取つたり。元行に防がれて、尼子の軍引き返して、復攻むる事なかりけり。

石川數正淺岡某に鞦の緒の結び樣を習ふ事

東照宮今川氏眞と、御不快の事起りし時、兼て駿河に岡崎三郎君留め置かせ給ひしを、小害すべき由聞ゆ。石川伯耆守數正この由聞きて、幼き御身の失はれさせ給はんに、御介錯に侍ふ人無らん事こそ口惜しけれ。よし〳〵數正

馳り向ひて、冥途の御供にこそ參らめとて、唯一人駿府に赴く。かゝる處に今川家の侍大將、鵜殿が子二人生捕られ、氏眞歎き給ふと聞き、我が君の御外祖、關口刑部大輔と相謀り、若君返させ給はんには、鵜殿が子返し參らせんと望む。氏眞悅びて、やがて若君を返し參らす。數正肩に乘せ申し、岡崎に歸りければ、御家人は言ふにや及ぶ、國中の貴賤、御迎ひに參り集うて、感ぜぬものこそなかりけれ。味方原合戰の時、數正は信長の加勢として、遠州に向ひけるが、武田押し寄すると聞き取つて返す。美濃の守護土岐家に有りといふ淺岡の某、弓箭をとりて、さる古兵と聞えしかば、彼れが許に行き、此度本國に歸りなば、必ず討死仕るべし。數正弓箭を取り打物取りて、形の如く軍に遇ふ事度々なり。然れども軍に臨むの日、鞦の緒結ばん樣、故實ある事と承りて、未だ學び候はず。されば死後に、鞦の緒とむる骨法知らざりしと、仇敵に笑はれ候ひなん事、骸の上の恥辱にて候へば、數を奉り度くこそとて習ひ傳へ、

夜を日に繼ぎて馳せ下り、味方原の軍にも、殊に勝れて武勇を振ひたりけり。其後太閤に欺かれ、岡崎の城を出て上方に登り、豐臣家に奉公す。太閤和泉を與へ、武者奉行を命ぜられぬ。數正德川家累代の君恩に叛き、一生の忠節武功を空しくす。血氣既に衰ふる時は、是れを戒むる事得るにありと云へる、聖人の言葉知らざりけるこそ憂たてけれ。

東照宮參河國一宮城御後卷の事

東照宮三河の一の宮の城に、本多百助信俊を守りに置かせ給ふ。永祿七年五月、今川氏眞三萬餘の兵を以て圍まれけり。其中八千を引き分ちて、武田信虎を大將として、後卷の防ぎにせられぬ。東照宮斯くと聞し召し、早や打ち立て一騎がけに、馳せ向ひ給はんと見えしかば、敵は味方に比ぶれば、十倍もあらん。殊に信虎は聞ゆる勇將に候ふと、老臣ども諫め奉れども、其理は然るべ

からん。されども人は貴賤にも依らじ、信義の二つに依りてこそ身を立つる習ひなれ。敵の城攻め落し、其まゝ壞ち捨てなば、さもあらんを既に味方を入れ置きて、今さら敵大軍なればとて、驚くべきや。主の大事は從者が救け、從者の危難は主の救くるは、弓箭とる道なり。今は後詰めに打ち負け、屍を戰場に曝すとも、運の盡きぬる所なり、と仰せければ、是を聞く人々、あはれ賴もしき大將かな。此殿の御爲には命を捨てん事、露塵ばかりも惜しからじと勇み進む。其勢に乘りて、二千ばかりの兵にて、後詰めに打ち向はせ給ひ、信虎の八千にて扣へたるを餘所に見て、眞直に城際に押し著け給ふ。城中競ひ悅ぶ事限りなし。氏眞さらば四方を取り圍んで、一人も餘さず討ち取らんと評定する。其の間に東照宮は、百助を召し具し給ひ、城を出て引き返し給ふ。百助今日の戰は、身にかけて勵むべく候ふとて、手の者四百餘を以て、信虎の軍に駈け合せ、打ち破りて利を得たり。酒井左衞門尉忠次、石川伯耆守數正、牧野右馬

允康成は後殿となる。追ひ駈くる程ならば忽ち切り崩すべき色現はれて見えければ、氏眞も進み得ず。東照宮事なく歸陣せさせ給へり。此れ廿二歳の御時なり。

三好松永光源院義輝朝臣を弑す事

永祿八年三好義繼松永久秀、大和河内より京に打ち入り、五月十九日辰の刻、光源院殿の館を圍み亂れ入りければ、防ぐ者ども或は討たれ或は自害す。沼田上野介と福阿彌といふ者、敵の相標、竹の葉を腰に挿して、外より紛れ入り、光源院殿の御前に參り、我れ等二人を始めとして、防ぎ箭仕り、思ふほど戰ひ候はん。其間に日比愛せさせ給ふ早足の御馬に召され、東川原に駈け出させ給はゞ、御運を開かせ給ふべきと、涙を流し申しければ、尤も忠義の志、神妙にも申しつるよ。されども、汝等討死したる跡に、殘り留まるべきやとて、

散々に防ぎ戰ひて、終に自害ありける。其際に

五月雨は露か涙かほとゝぎす我が名をあげよ雲の上まで

自ら筆を把りて、書き殘し給ひけるとぞ。光源院殿の弟に、鹿苑寺の周嵩といふ者ありしが、平田和泉守といふ者迎ひに遣し、北山より出たる道にて討ち取りしに、供せし十三四の童、忽ちに彼の平田を討ち取りければ、世の人賞めあへり。

是れ釋の義俊光源院殿追善和歌の序に見えて、扶桑拾葉に見えたり。されども童の名見えず。後に信長記を見るに、此人の姓名を記せり。小川の住人美濃屋小四郎とて、容貌世に勝れしが供したりしに、此變に遭ひて、三條吉則の刀を抽きて、和泉が首を打ち落し、手許に進む者五六人切り伏せて、腹切つて死せし由見ゆ。

三好實休戰死の事附 光忠の刀の事

三好修理大夫長慶は、細川讃岐守持隆の臣なり。三好は其先甲斐の源氏小笠原の族にて、信州に住せしが、三好長房の阿波の守護として、世々阿波にあり、京都に攻め上り、細川晴元に代りて、五畿内の事を執る、第二の弟を豐後守之長（後實休と稱す）其弟を安宅 摂津守冬康、其弟を十河一存といふ。天文二十一年實休 持隆を殺し、其後室を己れが妾とし、惡逆を恣にす。永祿五年、佐々木義弼京に攻め上りしかば、萬松院殿は八幡にありて防ぎ給ふ。畠山尾張守高政佐々木に與し、紀州より泉州に打ち出づるにより、實休阿波より渡海し、岸和田の東久米田に陣す。久米田寺に橘諸兄公の墓あり。實休墓を掘り、石の槨を取り出す。聞く人眉を顰めずと云ふ事なし。三月五日高政兵を分ち、先陣を額が原に押し出す。實休山上より見下し、自ら眞先に進んで、高政

が先陣を打ち破る。檜木山に伏せ置きたる高政の兵に、根來法師相加はり、不意に切つてかゝり、三木内匠一番槍を合せ、實休が先陣敗北しけり。實休は將机に腰懸けて引くな者共と下知し、散々に戰ひ、殘り少く討たれしが、實休を根來左京打ち取りたり。高政大に利を得、河内に押し入る。此時長慶が籠り飯盛の城を圍み攻む、冬康兄の吊軍を志し、且つ長慶を救はん爲に、岸和田を打ち出で、高政と藤井寺の南、葉引野にて軍あり。冬康勝利を得たり。實休討死の刀は、光忠が作なり。信長光忠が刀を好み、二十五腰まで集められしが、堺にて第一の好事、木津屋といへる商家に、かの光忠の刀を殘らず見せて、此中に實休光忠やあると問はるゝに、一腰取り出して、是れならんと云ふ信長何とて見知りたるやと問はるゝに、切先の少し缺けて候ふは、實休討死の時、根來左京を刎られしに、鍋あてに當りて欠けたると、承り候ふと申しければ、信長能く知りたりと云はれしとぞ。

實休討死の時、長慶は飯盛にて連歌せしに、告げ來る○すゝきにまじる蘆の一むらと云ふ句、人々附け煩ひたりしに、其書を披きて、とかくを云はずさし置き○古沼の淺き方より野となりて、と附け終りて、さて實休討死なりと告げ來れり。今日の連歌、是れにて止むべしとて、さて兵を出されしとなり。

信長都に攻め上るに及びて、松永は降參し、三好長慶が養嗣義繼は、河内にて自害し、三好の家滅亡せり。

一說、實休は泉州岸和田に、安宅摂津守冬康に守らしめたり。畠山高政は紀伊國廣浦と云へる所に、流落の體なりしが、熊野根來寺の法師をかり催し、岸和田へ押し寄すれば、實休後卷せんとて渡海し、堺の津にて勢揃ひせり。高政岸和田を攻めんとする兵を、城の上なる山に引き取り、城を見下したり。四國の兵は篠原右京進長房、一宮長門守成助等、岸和田の大手に

陣し、實休旗本は久米田にありしに高政が陣を見て、高政は東をさして引退くと覺ゆ。遙々爰に來て、討ち漏らさん事、口惜しき事なり。山上へ押し懸けて、一騎も餘すまじと下知するを、摂州高槻の城主入江左近大夫、鹽田采女正二人、京よりの使として來り居しが、敵を小勢なりと見て、左宣ひ候へど、今已の時なり。高政軍配よし、味方の爲には大凶なり。唯今かゝらば、十に十敗北すべし。暫く時を移し、東の谷より二手にて應接ひ午の時に及びて軍を進むるか、又敵を南山へそびき出すか、此二つの間に過ぎじと云へば、實休心安かれ、時を過さば敵に利あるべし。切つて懸かりなば、彼れなる山を尾傳ひに、東北へ下るべし。左なくば南へ下り、右の尾さきへ引き取るべし。入江鹽田二手に兵少ければ、篠原をさし添へなん。打ち連れて、伏兵になられよ。高政夢にも知らずして、東北の道に出なんを、待ちかけて打たば安かりなん。高政若し物見を出して見付くる程

ならば南の山に登り、横合に突き懸かられよ。高政は籠中の鳥なりとて、二人の詞を用ひず。入江等東北の山際に進んで待ち居たり。實休は篠原が兵を以て、高政を誘かせけるに、長房勇みかゝりて進み行く。山の上より根來法師、成田玄齋、雑賀孫市に、實休旗本僅に見ゆ、左へ廻りて切つてかゝり、勝敗を一時に決すべし。阿蹟淡の三國の兵を引き請けて、一手立なくはあらず、若し實休を討ち漏らさば、ともに戰死すべしと云へば、孫市子細にや及ぶとて、山を下り立ち、眞一文字に實休旗本に押し懸かり、忽ち實休を槍玉に揚げて討ち取りたり。鹽田等は敵を待てども見えざればいかにと思ひ、物見を出す所に、實休討死を告げ來る。さらば高政が陣に切つて入り、討死せよとて駈け向ひけるに、勝に乘りたる敵をかさに受け、鹽田も討死しければ、殘る兵ども、堺をさして敗北しけり。これ永祿五年壬戌三月五日、久米田合戰にて、實休三十六歳なりといへり。

浦兵部高名の事

毛利元就、豐前門司の城の圍みを解きて引き返されし時、大友宗麟の士大將瀧田民部、只一騎波打ち際に馳來る。小早川隆景の士浦兵部宗勝船をさし戻し、陸に上り瀧田を討ち取りて歸る。遠く是れを見る人、誰れならんと云ふに、元就只一人陸に上りたらば、必ず兵部なるべしと云はれしに、果して違はざりけり。井上伯耆と浦と、二人勇名世に高し。二人とも裂れたる物の具を著たり、又定まりたる得道具もなく、瀧田を討ちし時も、人の槍を取りて返せしとぞ。

中村新兵衞永原安藝守一騎打の事

佐々木と三好と軍す。佐々木は糺に陣し、三好は赤山にあり。三好使を以て

中村新兵衛と云ふ剛の者あり、我れと思はん人あらば出されよ。人交ぜもせて、戰はせんと云ひしかば、佐々木が内にて、江州に隱れなき永原安藝守といふ者を選り出す。修覺寺村石地藏の前に出遇ひて、永原は直槍、中村は十文字の槍にて、散々に戰ひけるが、永原を突き伏せ首を取る。中村は近江國の人なり。一日に槍を合する事十七度。首四十一級を得たる事ありければ、世に槍中村と稱しけり。

永原を討ち取りし時、室町將軍靈陽院殿義昭、江州矢島にて是れを聞し召し、感狀に朱塗の物の具、朱柄の槍を添へて賜はりけると云へり。一說に、攝州を半分領しける松山新介が士にて、唐冠金櫻の冑を著たりといふ。

北條綱成地黃八幡の旗を捨つる事

相模の深澤の軍に、北條家の先陣の大將、北條左衞門大夫綱成敗北して、捨てたる旗を拾ひ取て識りけるを、信玄聞きて、逃げ走りて汚なく棄てたるにあらじ、必ず地利を計りて、戰を心懸けたるならん。旗を棄てしは旗さしの罪なり、いかでか嘲り笑ふべきとて、眞田一德齋が末子の源次郎に、左衞門大夫が武勇にあやかれとて、かの旗を與へられけり。練絹三幅朽葉地黃にて、八幡といふ二字を染めたる物にて、世に地黃八幡と稱へしなり。左衞門大夫斯くと傳へ聞きて、信玄の詞にて、恥辱を雪ぎたりと悅びけり。是れ信玄遠き慮ありて、斯くは云はれしなり。左衞門大夫は、其比勝れたる勇將なれば嘲り笑はるゝと聞きて、必死の軍するならば、其鋒支へ難しと察せられて、其憤りを散ぜん爲とぞ。

柴田勝家水缸を破りて城を守りし事

永祿十二年佐々木承禎柴田勝家が守る所の長光寺の城を圍みて攻むる。遂に惣構を打破る。勝家本丸にありて、爰を專途と防ぎ戰ふ。鄕民佐々木が陣に行きて、此城は水の手遠く、遙なる所より水を取り候。それを取り切る程ならば、城は保つべからず、と告げ知らせければ、承禎悦びて水の手を取り切つたり。城中是れに困しめども、弱れる色を現はさず。承禎これを見ん爲に、和平せんとて、平井甚介を使にして、城中に入らしめたり。平井勝家に對面し手水を請ふ。缸に水滿ちたるを、小性兩人して舁き出でたるに、平井手を洗ひければ、小性殘れる水を庭に捨てたり。平井歸りて斯くと云へば、事の違ひたる故に怪しみ合へり。かくて城中既に水竭きければ、勝家明日は討つて出で切り死にせんとて、諸士を集め最期の酒宴す。殘れる水を問へば、二斛ばかり入るべき缸を舁き出す。さらば此間の渴をやめよとて、人々汲み飲みてければ、勝家眉尖刀の石突にて、缸を碎きたり。夜明け方に門を開き打つて出る。佐々

木思ひも依らざれば。大に敗北しければ、勝家首八百餘級を得て岐阜に獻ず。勝家は猶長光寺にあり。信長感狀を與へ、賞せらるゝ事大方ならず。是れより勝家を、缸破柴田と世に稱しけり。

勝家先陣の將となる事

信長勝家を以て、先陣の大將とす。勝家固く辭すれども、再三强ひて、後仰を承りぬとて退出する時、安土の城下にて、信長旗本の士に遭ひたりしに行當れり。勝家無禮を責めて遂に切つて捨てたりければ、信長怒られけり。其時勝家謹んで申しけるは、されば こそ、先陣をば是非とも辭し申したるなれ。子細なくて辭し申すべきや。先陣の大將たる者、威權なき時は、下知行はれざるものなり。如何にと云へば、信長詞なかりけり。

坪内某料理の事

三好家滅びし時、料理庖丁の上手と聞えし坪内何某といへる者、生捕りとなりしが、放し囚にしてありしに、年經て後、菅谷九右衛門に賄ひ申しける、市原五右衛門、坪内は鶴鯉の庖丁は云ふにも及ばず、七五三の饗膳の儀式能く知れる者なり。其上子供兩人は、既に奉公申し候へば、ゆるされ候うて、厨の事を司らせ申さんと云ひけるを、信長聞きて、明朝の料理させよ。其鹽梅によらんとなりしかば、則ち坪内をして、膳を出させけるを、信長食して、水臭くて食はれざるよ。それ誅せ〻、と怒られしかば、坪内畏り承はり候。今一度仕らん。夫にても御心に應ぜずば、腹切らんといへば、信長許容せられたり。扨その翌日膳を出しけるに、味の甘き事、殊の外に善かりければ、信長悦びて祿與へられけり。坪内辱き由申して、さて昨日の鹽梅は、三好家の風なり。

けさの鹽梅は、第三番の鹽梅なり。三好家は長輝より五代、公方家の事をとり、日本國の政をとり計らひぬれば、何事も卑しからず。其好む所、第一等の鹽梅を、昨日奉りければ、卑しみ給ふ事道理なり、今朝の風味は、野卑なる田舍風にて候へば、御心に入りたるなりと云ひければ、聞く人、信長に恥辱を與へたる坪内が詞なりと云ひ合へり。

大澤左衛門が手の者ども東照宮を窺ひ奉りし事

永祿十二年四月、東照宮濱松に歸らせ給ふ時、

これは今川氏眞を、武田信玄攻め落し、氏眞ときの山家に引き籠りけるを、東照宮父義元のよしみ故に、遠江をば德川家より治むべし。信玄に取られたるよりは優るべきなり。さらば小田原と相計りて、兩旗にて信玄と軍すべき、と氏眞に仰せられしかば、忝き由申して、掛川の城を德川家に渡

し、氏政信玄薩埵山にて對陣し、足輕競り合ひあり。東照宮の先陣駿河へ攻め入り、山縣三郎兵衛を追落しければ、信玄前後に取り挾まれて、勝利あるまじきを計りて、甲州へ兵を返されけるゆゑ、東照宮も御歸陣なり。

堀川の城を打ち過ぎさせ給ふ時、大澤左衛門尉

これより前永祿十一年、東照宮遠江を過半治め給ひし時、降參しけるものなり。

が手の者ども、去年より零落れたる面々相計り、尾藤主膳村山修理、兩人を大將にして、堀川に密に一揆を構へ、通らせ給ふを待ちかけて、討奉らんと仕度しけるに、それを知し召さずして、七騎にて打ち過ぎさせ給ひぬ。一揆ども餘りに騎馬の少かりければ、斯くとも知らず、其後より石川伯耆守數正通りけるを見て、さては先に通らせられしにや、容易く討つべき物をと悔みけるとぞ、創業の人君天の佑けおはしけると覺えたり。其後堀川の一揆を攻めらるゝに

此城潮のさしたる時は、船の出入自由なるに、折しも引潮にて、唯一方口の城なりしかば、落つべき方なくて、皆討ち取られけり。

清洲にて東照宮信長公御對面の事

永祿十二年、尾張の清洲にて、東照宮信長に始めて御對面の時、他の刀持ちたる士、式臺にとめらる。植村庄左衛門家正御刀を持ちて通らんとす。これをも押し留むれば、德川家の士に、誰が下知にて止むるや、と云ひ捨てゝ押し通り、御前の白洲に參りたるを、信長見て何者ぞと問はるゝに、東照宮我が士に候ふとて答へ給ふ。信長植村は聞ゆる勇士なり。今日の會は大事にあらず、心安かるべし、天晴よき士、數多候ふとぞ感ぜられける。莊左衛門後出羽守といふ。

信長公伊勢の國司を亡し給ひし事

永祿十二年、信長伊勢の國司北畠中納言具敎を、大河内の城に攻むる。數月經て、城強くして些ともひろまず。信長織田掃部介を使にして、信雄を以て具敎の子具房の養子として、和平すべしと云はせられしかば、人質を取るに同じとて、和平事なりぬ。信長岐阜に歸り、二男茶茎丸十二歳なりしが、士數多附けて伊勢に行く。大河内に至りて國司に對面し船江にあり。具敎は世を具房に讓りて、三瀨といふ所に閑居せられしが、尙信長に背く志ありければ、信長國司の家の者共をかたらひ、天正四年十一月廿五日、三瀨にて弑しけり。具房は信雄の養父なれば、河内(大河内か)に押し籠めて置かれけるが、天正十六年に死去す。其元祖、親房鄕より具房に至て、十世に及ぶとなん。具敎の弟南都東門院の住僧なりけるが、具敎弑せられけるを聞き、南都を出て伊賀に赴き、

還俗して北畠具親と稱し、三瀨河股多藝小梨の諸士を語らひ、仇を報ぜんとす。れども、利なくして中國に流落し、毛利家を賴み、備後の鞆に居たりけり。具親兵を起す時、天正六年信雄の兵、波瀨峯の城を攻め落す。六呂木、山副、波多瀨三郎、此三人を生捕りたりければ、死罪にすべきと議せられしに、三郎が容貌世にすぐれしかば、信雄助くべしと云はれしを、三郎聞きて三人同じく生捕られ、罪又相同じ。二人死して、一人助かる事面目なし。共に誅せられ候へといふ。二人は年老いぬ。惜しむべき身にあらず。三郎は仰せに從ひ候へと、勸むれども聞き入れず。遂に三人共に磔にかけらるゝ時に、三人君の御爲に命をすつる事、士の思ひ出、面目これに過ぐる事無しとて、謠をうたひ、物語りして誅せられけり。三郎此時十五歳、惜しまぬ人なかりしと云へり。玉井新次郎といふ者、具親に心を合せ、信雄に背きしが、父兵部少輔と母ともに、二神戸に隱れ居たりしを搜し出して、櫛田河原にて磔にせらる。兵部少輔子の

新次郎を呼びて、汝今度君の御仇を討い、北畠の家を興さんと志しける事士の本意、吾が生前の悦びなりとて、水を乞ひて、父子三人盃を汲み交はして、其後殺されしとぞ。織田家の刑罰、仁者の道にあらず。其暴逆終を令せざることの道理なり。

大久保忠隣功名の事

永祿十二年今川氏眞、遠州掛川の城沒落の時、天王山にての合戰に、大久保治右衞門忠佐敵を突き伏せ、甥の新十郎忠隣に其首取りて、汝が功名にせよと呼ばりければ、忠隣十七歳なるが、人の呉れたる首何にかすべきとて、敵の中に駈け入りて首をとる。味方原にて諸軍散亂して、東照宮に附き奉る人少かりしに、御側を離れず。後は歩立にて御供しけるを、小栗忠藏敵の馬を取り來て、それに乘れと仰せ有つて、其馬に乘て御供申しけり。後に相摸守と申せしは此

人なり。

高木主水村越與三右衞門後殿の事

遠州にての事なりしが、何れの時の軍にや、東照宮の御内に、高木主水清秀村越與三右衞門とて、聞ゆる兵二人、味方に離れ、細曖をしづ〳〵と、引き退く處に、敵十騎ばかり追ひ來る。高木槍おつ取り直し、一足も引くまじきぞと呼はる。村越弓に箭をつがひ、槍わきを射ん、心強く槍をせよ、と云ひければ、敵しらむ故兩人又退く。かくする事數度に及べり。かくて左右沼にて、一騎打の地になりて、こゝぞよき所と云ふ程こそあれ、高木踏み留り、先駈けたる敵を突き伏すれば、村越大音あげ、其首とれと云ふまゝに、敵一人射倒す。敵ひるむ所を、高木勇み進んで、又一人突き伏しければ村越も又一人射倒して、それより追はざれば、心靜かに引き取りけり。

清秀は水野下野守信元に屬せし時、三州苅屋の戰に、度々功名ありしが、後德川家に仕ふ。水野に屬せし時、石が瀨といふ所にて、三河の兵と槍を合する事、一日に七度、石川伯耆守十七歳にて、内記といひしが、互に名のりて槍を合せ、相引にしたりけり。長久手の軍には、清秀内藤四郎左衞門武者奉行たりき。清秀老年の後、關が原の時隱居せしが、野州小山へ參りければ、度々の功名を仰せられ、台德院殿錦の御羽折を賜りけるとぞ戰國の時も、一日に數度の槍は罕なる事なり。高天神小笠原與八郎が士林平六郎、遠州豆大寺にて六度槍を合せ、信玄伊豆の韮山を放火し、山縣をおさへに置かれしに、城兵打て出で、引とり口に、三河の浪人河村傳兵衞白四方に、船の字の指物にて敵を追散らし、槍を合する事、一日に六度といへり。

太田下野識鑒の事

太田三樂が内に、太田下野といふ士、能く人を識る。其嗣遣はざりしかば、三樂如何なる故ぞと問ふ。下野別の子細も候はず。例へば連歌する者の、古歌を覺え候ふは、我が連歌の益にせんとなり。士の功名を志す者も又然なり。其人々の嗜み好む所によりて察し候へば、十に八九は違ひ候はぬものなりとぞ答へける。

北條丹後指物の事

北條丹後一尺四方の白練に、黑き蟻を繪に書きて、指物にしけるを、謙信見て、汝が指物、餘りに小きは、如何なる子細ぞと問はるゝに、丹後誠に味方よりは、見え難く候ふべし。さはあれども、進むに先駈けし、退くに何時も後殿

せんに、他人の大なる指物も此小四半と、敵の見る所は同じからん、と存ずるなりと申せば、謙信道理なりと云はれしとぞ。

淺井長政齋藤龍興と軍の事

淺井備前守長政玉淵川をかぎりて、齋藤龍興と軍す。ある時長政、五百ばかりの兵をすぐり、關原野上の宿に火をかけ、樫井の前なる小川に、柵の木結びて待ちかけたり。龍興一萬ばかりにて出ると長政聞きて、百人許を菩提の徑より、敵の後へ廻らせ、自ら四百ばかりを以て、敵の怠るを夜討にしたりけり。徑よりの兵も馳せ來り、思ひも寄らぬ所より、鬨の聲をあげしかば、龍興内通の者あるよと思ひ、狼狽てゝ岐阜に引き返す。長政大垣の邊、所々に火をかけさせければ、龍興敵勝に乘つて大垣を攻むるならん、いざ援けよとて、岐阜を出でしかば、長政やがて引き返す時、足輕の物に馴れたるを三十人、樫井の

の土民の家に隠したり、龍興樫井に入て、士卒も疲れしかばゝ兵粮つかうて怠りたりける時、隠したる足輕ども所々に火をかけて燒き立つる。長政思ひも寄らぬ所へ押し寄せて散々に打ち破り、やがて南宮山に登りて敵を待つ。龍興二度まで敗北し、口惜しく思ひて、四面を取り卷きて、餘さず討たんと押し寄せたり。長政見て、敵は大軍なり。十死一生の戰とは是れなるべし。我が下知なき内は、箭の一筋も射べからずと云ひて、攻めかゝるを待て、山の上より一文字に切つてかゝれば、龍興大に敗軍し、是れより長政を恐れて、復軍する事無かりけり。

丸毛兵庫助軍配の事

丸毛兵庫助長住、其子三郎兵衛長隆、龍興に奉公して、美濃の多藝郡大塚の城にあり。安藤伊賀守氏家、常陸介龍興に叛きて大塚に押し寄る。兵庫父

子三百ばかり、大塚より一里餘り出て陣し、城近き百姓老若男女を云はず驅り催し、手々に竹竿を持たせ、大軍の體に持て做し、終に氏家を擊ち破りしかば安藤等も又龍興に降參し、丸毛父子に祿を增し感狀を與へられけり。

馬場美濃守今川の館を燒く事

信玄駿河に攻め入る時、朝比奈兵衛を始めとして、軍する者なく、今川氏眞落ちられしかば、信玄疾く今川の館に馳せ行きて、名物の寶物ども奪取り來れと下知せらる。馬場美濃守氏房聞きもあへず、唯一騎鞭に鎧を合せて、館に駈け入り、火をかけて燒拂ひけり。是れ寶物ども奪ひ取りて、貪慾の師なりと嘲られん事を、慮りたるなるべし。

大友義鎭肥前國退口の事

元龜元年の春、大友左衛門督義鎭、肥前の龍造寺山城守隆信を討つ。隆信和を乞ひしかば、大友兵を加へず。肥前と筑後の堺に、千栗といへる大川あり。吉岡下總入道宗觀といふ者、龍造寺は大敵なり、勝負もわかれず、故なく和を乞ひしは、謀あるべし。千栗を渡らん事、容易からじと云へば、義鎭も尤なりとて、豊後の留守に置きたる佐伯紀伊守惟教、其子彈正少弼惟眞、田原近江入道紹恩を呼び寄せ、六千の兵を二陣として、千栗の渡に備へて、川をわたる。隆信は謀りて、敵の引き退かん所を、不意に擊たんと謀りしに、大友の設ある事を聞きて追はざりしとなり。

信長公東照宮に爲朝の鏃を進らせられし事、

元龜元年六月、信長朝倉を擊つて龍が鼻に陣す。東照宮援兵のため、廿四日江北に御着陣、評定の時、信長槍を持ち出でて、此槍は鎭西八郎の鏃なり。德

川殿は源氏なれば進らせ候。明日の軍に勝利候へと云はれけり。今の虎の皮投鞘の御槍是れなり。

姉川合戰の事

姉川の軍に、信長は龍が鼻山を左にして、淺井長政に向はる。東照宮は龍が鼻を右にして、朝倉が二萬餘りに向はせ給ふ時、小笠原與八郎氏助二千ばかり先陣に進んで川を渉る。氏助が兵、伏木久内、中山是非之助、吉原又兵衛、林平六、伊達與兵衛門、奈左近右衛門、渡邊金太夫照、七人槍を合する中にも、渡邊は朱の傘に、金の短冊十八附けたる指し物を插し、堤の上を進む。信長見て其夜召し出して、天下の槍なりといふ。感狀に貞宗の刀を添へて與へらる。殘る六人の者共憤りて、各猶進んで槍を合せしかども、畠の中なりし故、見とめられず候ふと申しければ、六人共信長感狀を與へらる。

姉川合戰榊原二の手功名の事

姉川にて、酒井左衛門尉忠次先陣たり。二陣は榊原康政なり。酒井を始め小笠原與八郎、菅沼新八郎、奥平等、川を渉りてかゝりけるに、岸高く上りかねたる處に、榊原眞一文字に進んで、上り難き岸を、無二無三に押し揚げよとゑいとう〳〵と云ひて押し上り、酒井が先に進まんとするを見て、酒井が兵遲れては無念なりと、競ひかゝりて利を得たり。東照宮榊原が二の手の仕方以來の手本なり。二の手は斯くの如く仕度くこそと仰せありけり。

三井角右衛門生瀨平右衛門功名穿鑿の事

姉川の戰に、坂井右近が子久藏、十六歳にて討死す。久藏は十二の時、信長始めて京に入りし比、近江北郡にて、槍を合せたる剛の者なり。三井角右衛門

生瀬平右衛門、二人とも久藏が首を得たりといふ。二人後闕白秀次に仕へければ、此事沙汰ありて、三井が僞りなりとて、鷹部屋に押し籠め置きて、罪に行はれんとす。三井命を惜むにあらず。人の功名を盜みたる惡名の、子孫の恥とならん事口惜しければ、今一度詮議して賜り候へ。證據は淺見藤右衛門に問はれなば、實否正しかるべしと訴へたり。淺見を安土より呼ばれけり。淺見は生瀬と久しき友なり。三井とは日比中好からず、不通なれば疑ひもなく、三井が僞りに定まるべし。三井惑亂して、淺見を證人にしたりと誹り笑ふ人多し。さて聚樂の廣間に、奉行列坐して、雀部淡路守を以て尋ね問はる。淺見承り、生瀬は年比の知音なり。三井とは不通にて候、是非世の人の評せん事も迷惑なり他人に仰せ付けられよと、懇に辭し申す。中好からぬ三井が、虛妄を云ふに心よからぬは理なれども、證人に引きたる上は、疾く申せと勸めらるれども猶辭し申す。秀次聞きて重て辭すべからずとなりければ、其時淺見、今は已む

事を得ず候。武義の論少しも詐僞候ふまじ。坂井が首は、三井が取りたるに紛れなく、又其働きも比類少く候。生瀬は何と存じ過ちたるにやと云ひければ、一坐駭きて、とかく云ふ人なく、これによりて、三井を赦して賞せらる。生瀬は秀次に寵せらるゝの故に罪に及ばず。右近は信長の大將なり。三井生瀬は朝倉淺井兩家の士なり。淺見は後京極高次に仕へて、大津の城にて武名を現はしけり。

金松彌五左衛門物見の事

信長淺井長政を擊つ時、長政が木造の陣、俄に駿ぐ體の見えしかば、猪子兵助を物見に遣られけるが、又金松彌五左衛門をも出されけり。猪子馬に白泡かませて馳せ歸り、敵は引き退き候ふと云ひもはてぬに、金松乘り歸り、敵押し寄せ候ふと云ひ捨てゝ、又先陣に行いて槍を合せたり。信長後に二人を呼びて

汝等見し所は、如何にと問はるゝに、猪子敵は荷附けたる馬を、遙に遠く引き退け候ふ程に、引き退くと見て候ふと申す。金松承り見る處は、猪子に同じく候されども軍を志し候ふ長政、故なくして、空しく退くべきや、押し寄せて戰はんためと存じ候ひき、と申せしかば、信長大に賞められけり。

信長公朝倉を擊ち給ひし事

信長越前に攻め入る時、朝倉義景二萬ばかりの兵にて、刀根山といふ大山に陣取り、懸に信長の先陣控へ居たり。ある日、信長井樓に上り、敵を見渡し、敵は今夜必ず引き退くべし、先陣の者共な怠りそと、使を度々遣りて下知せらる。是れを聞きて、殿は如何で斯くは仰せ候ふやらん、敵大軍にて、山に據り地の利を得て、且主戰なれば、何條引き退くべきと怪しみけり。夜に入りても、信長は猶非樓にありて、敵陣を睨んで、日も離たずしてありしが、丑の刻

ばかりに、すはや敵は退くぞと云ふ程こそあれ、螺吹き立てさせ、馬に乘り、先陣の大ぬる山の奴原が、油斷したるに、旗本の者ども、功名せよとて、眞一文字に進まれしが、果して、先陣はおくれて、信長の旗本にて勝利を得られけり。信長常に怠る者を、大ぬる山とて笑はれしとぞ。

長野信濃守上野國箕輪城を守る事

上杉の舊臣、上野の長野信濃守業正は、在五中將業平の後胤なりといへり。世々上野箕輪に在り。此城は、大名明神の山の尾崎をとりて、城の廓とす。廓の形箕の手に似たりとて、箕輪といふ。上杉家衰へけれども、獨立して武威を震ひ、信玄に屬せず。信玄これを攻むること五年、終に一度もおくれを取らず。病の後、二年を經て落城すといへり。

箕形原合戰の事

元龜三年、信玄參河遠江に軍を出し、二股の城を取り卷き、水の手を取り切りければ、中根平左衞門力の限り支へけれども、竟に叶はで城落ちたりけり。信玄それより箕形原に軍を進む。濱松には織田家の加勢もありと、信玄聞いて、はる〳〵來て、客戰ばすまじきとて、おさへを置くべきやといふ處に、三河武者、城を押し出すと聞えければ、一戰に及ぶべしと、備配りあり、濱松の軍兵、日既に暮れなんとすれども、勇みかゝりて、一軍すべしと口々に申す。鳥井四郎右衞門物見して乘り歸り、人々はいかに申し候ふとも、今日の御合戰は然るべからず。敵は大軍なり。先陣に使を遣り兵を上げさせ給へ。もし是非御一戰とならば、敵ほつたの鄕へ押し行かん處を、慕ひてかゝらせ給へと申す東照宮聞し召し、汝は用にも立つべき者と思て、今日の物見に遣りたるに、何

とておくれたるや。目前に敵をおめ〳〵と通しては、生甲斐もなしと怒らせ給ふ。四郎左衞門承り、目の明きたる故にこそ、勝敗の利害をば見極めて申し候へ。御敗軍を知し召し、御掛りあらんは、殿の御心のまゝなるべきなり。勝敗の道を知らぬ人こそ、おくれ者よと、以ての外に罵り、其處をつと乘り出し、成瀨藤藏を尋ねけるに、功名したりと聞き、即ち晴れなる討死したりけり。味方原の前夜、手分けを定めらるゝ時、成瀨と鳥井と、先後を爭ふ事ありて、既に刺し交へて、死すべき色現はれしを、傍への人々押し留めたるに鳥井成瀨に向ひて、明日信玄と一戰あるべきなり、織田家の援兵も來りぬ、士は一人も大切の時なるに、私の爭論して死なんは、不忠ならずや。二人共犬死して、殿に損掛け奉らんより、明日の軍に功名比べして、討死せんは如何に。成瀨につこと笑ひ、いしくも申されたる哉、我れも左こそ思へ、明日討死せん。いざとて酒汲み交し、深更に及べり。東照宮これを知

らせ給はで、成瀬は、信長の加勢の目付として、あら井本坂に向ふべし。鳥井は、濱松先陣の目付せよ、とぞ仰せられける。二人は必死を期したれば、鳥井も一處にあり、二騎先駈けて、二萬餘の敵に馳せ向ふ。鳥井冑首三つ取りて、成瀬も首三つ取りて行き遇ひ、共に打ち笑ひて、首をば拋げ捨て、又駈け向ふ。鳥井又首とりて、成瀬を問へば、只今山縣が陣にかけ入て討死し、敵其首を取りたりと云ふを聞きて、成瀬に先立たれしよ、汝は疾く歸りて、朋輩に語り候へ、と從者に云ひ捨て、信玄の旗本をさして駈け入らんとせしを、土屋右衞門が手の者ども、取り圍みけり。鳥井は勝れて逞しき剛の者にて、三尺餘りの野太刀を打ち振り、死狂ひに切つて廻る。土屋が冑を、破れよ碎けよと斬りたりけるに、目眩みて馬より落る。多兵四方より槍すくめにして、鳥井を討ち取りたり。敵も味方も押し並べて惜しみ合へり。

渡邊半藏守綱も、物見して馳せ歸り、是れも味方中々危く候。先陣を呼び返させ給へと申す。されども壯士等勇みかゝりて、柴田七九郎大久保治右衞門進み行くを、半藏ひらに止れといへども聞き入れず、甲斐の先陣小山田に向つて足輕をかくる。軍始まりて、先陣亂れ足になりければ、石川伯耆守數正馬より下り立ち、槍を提げ、一足も引くまじと呼ばはり、一陣の士卒、各折りしきて槍衾を作り待ちかけたり。甲斐の兵競ひかゝるを、近々と引き受け一同に立ちあがり、ゑい〳〵と、聲をあげて追ひかへす。外山小作一番槍を合せたり。日暮れければ、甲斐の大軍進みかゝる。東照宮御旗本を率ゐて切つて掛からせ給へば、遠江の山家三方小山田追ひ立てられ敗れけり。申の刻より軍始りて、夜更くるまでの軍に、衆寡支へ難くて、崩れ立ちしに、榊原は東の方、西島に向て引き退く。信長の侍大將平手汎秀は、いなと云ふ所にて返り合せ討死す。鳥井四郎左衞門を始めとして、河澄源五郎、長谷川紀伊守、加藤二郎九郎等、

逞兵三百餘人討たれ、敵頻に追ひ來る。本多肥後守忠直後殿して敵近付けば、取つて返し、遂に討死す。甲斐の士大將秋山伯耆守晴近、透間なく追ひ駈け來り、御馬廻殘り尠くなりしかば、東照宮御馬を引き返させられし時、夏目次郎左衞門吉信、こゝは御討死の時にては候はずと申して、御馬の口を濱松の方へ引き向け、槍を取り直し、御馬の三頭を、疊み掛けて叩きければ、御馬かけ出でぬ、夏目踏み止り、多勢に取り卷かれ、槍の柄の折るゝばかりに戰ひて討死す。

夏目は濱松の御留守なりしが、矢倉より軍の樣を見て、急ぎ馳せ參り疾く御城に歸らせ給へと申せども、吾が城下に於て打ち敗けなば、命生きて何にかせんとて、御馬副の者に、口を放せと仰せられしを、吉信御馬の口を放しそと、堅く下知し、馬より飛び下り、御諱を賜り候へ、討死仕るべしとて、御馬に付きたる、畔柳助九郎に下知して、御馬を御城の方に引き

向けさせ、槍の柄にて、御馬の三頭を叩き、取て返し、十文字の槍にて、追ひ來る敵を支へて、討死しけるとも云へり。是れより前、三河一向宗一揆の時、彼の宗門を信ずる人々、ひし〳〵と相集り、櫻井の松平監物、上野の酒井將監、大草の松平七郎も與しけり。中にも夏目次郎左衞門は、一族も多かりけるが、彼の宗門に徒黨して、己が知行所に、要害を構へ立て籠りしを、松平主殿助伊忠不意に押し寄せ、木戸を打ち破り、攻め入りしかば、夏目防ぎかれ、帑藏の中に隱れ入りたるを殺すは籠の中の鳥を殺すに似たり、助けてこそと仰せあり。主殿打ち殺して後申すべき物をと云ひながら、人數を引きとりぬ。夏目岡崎の方を伏し拜み、かゝる仁愛深き殿に、楯つきし事の悔しさよとて、其日より宗門の本寺の前に參りて、殿の御爲に、命をすてさせ給はれと祈りけるが、果して戮死を遂げにけり

又一說に、夏目大津半右衞門、同伊織、乙部八兵衞等六千餘、額田郡野田

の古城に立て籠りけるに、深溝の城より、松平主殿助伊忠是れを攻むる、乙部はもとより一向宗にあらざれども、夏目と無二の知音たる故、同じく籠りしが、遂に免すべからざる事を察し、夏目を助けん爲に、久留善四郎と相謀り、伊忠に内通し、寄手を引き入れしかば、半右衞門は針崎へ落ち行き、夏目は藏の中に隱れしを、乙部夏目を助け候へと、伊忠に乞ふ。乙部が朋友を捨てざる事を伊忠感じ、夏目も亦武功ありし者ゆゑ、藏を取り卷きて、此旨を歎き申しければ、御赦ありけり。夏目愚にして、一揆に與せし事を後悔し、藏より出て伊忠に降參しけるともいへり。

水野左近大夫も、引きさがり支へけれども、敵猶競ひかゝれば、又御馬を引き返させ給ふ。成瀨吉右衞門、日下部兵右衞門、小栗忠藏、島田治兵衞、歩立ちにて御供す。敵六七騎進み來るを、成瀨一騎切つて落し、御馬を返させ給へば六騎は追ひ留りぬ。大久保新十郎忠隣、御馬の傍を離れ奉らず。大久保七郎右

衞門忠世、さいがかけの邊に御旗を押し立て、敗軍の味方を集むる。其際に濱松に引き取らせ給ひけり。敵、城近く押寄れば、鳥居彦右衞門元忠玄默口より討つて出で相戰ふ。渡邊半藏兄弟、勝屋甚五兵衞、櫻井庄之助、名乘り掛けて槍を入れ、敵五人討ち取り、押し掛かる敵を追ひ拂ふ。石川伯耆守と大久保七郎右衞門と相謀り、鐵砲を釣瓶放に打ち立てさすれば、詰め寄せたる敵も皆引き返す。味方疲れ果てけるに、天野三郎兵衞大久保七郎衞門と心を合せ敗軍の中を求めて、鐵砲只十六挺ありしを引き具し、信玄の陣さいがかけに向ひて打ち掛けしかば、甲斐の軍、夜合戰にかゝるかと狼狽てゝ、暗さは暗し、案内は知らず。さいがかけへ落つる者、其數を知らず。

又一說、其夜酒井左衞門尉忠次、今夜武田の軍兵、疲れたらんは必定なり夜討ちせんとて忍を出し、信玄の陣屋の樣を見せけるに、爰には何色の旗の紋あり、彼處には此色の旗を立てたりと云ひけるを忠次聞きて、疲れた

る兵を後陣に引き退け、後陣を先に繰り換へたるなり。信玄の慮淺からずとて、夜討はせざりけり。後に聞くに、其夜信玄の士卒一人も眠れる者なかりしとも云へり。

夜明けて、信玄兵を返して、おさかべに越年あり。是れ元龜元年十二月廿二日、遠州箕形原の合戰なり。

箕形原合戰信玄遠謀の事

箕形原の軍終りて、皆濱松の城を攻めんと云ひけるに、信玄勝つて兜の緒を締むるといふことありとて、軍を返されけり。此時信長は、白須賀に毛利河内守、山中に瀧川伊豫守、吉田に稻葉伊豫守其兵三萬餘りにて置かれたり。若し信玄勝に乘りて引き取らずば、信長二萬五千を率ゐて押し寄せ、毛利瀧川等も思ひも寄らぬ所に、打つて掛かる程ならば、必ず濱松よりも切つて出で、中

に取りこめて軍せんと、吉田より岐阜まで、一里に一人の忍の者を置いて待たれけるに、信玄引き返されしによりて、信長の謀空しくなりぬ。

箕形原合戰東照宮御退口の事

箕形原の軍に、甲斐の兵激しく追ひ掛けたりしかば、東照宮幾度となく御馬を返し給ふ。大久保五郎右衞門忠次手負ひて、歩立ちになりしが、菅沼藤藏定吉に詞をかくれば、忠次を馬の前輪にのらせて退きたりけり。後に菅沼に長光の刀を賜りて、賞せさせ給ふ。菅沼又引き返して、追ひ來る敵を防ぎけり。天野康景、長坂源次郎、坂部又十郎等も、踏み留りて防ぎ戰ふ。大久保相摸守忠隣（此時新十郎）馬を射られ、歩立ちに成りて危かりしを御覽じて、小栗忠藏久次（後に忠左衞門と稱す）に、新十郎若武者なり、あれ助けよ、と仰せられしかば、久次已が馬に、忠隣を抱き乘せて引き退く。敵透間なく追詰め奉りけ

る武者ありけるを、野中三五郎重次、返し合せて討ち取りければ、後に信國の刀を賜りぬ。畔柳助九郎御馬の傍を離れず、後に金の扇を賜りて、賞せさせけり。猶敵手繁く追詰め奉りけるに、水野太郎作踏み留まりて、防ぎ戦ふを御覽じて、又御馬を引き返さる。成瀬吉右衛門正一は、兄が最後に、汝は此邊の案内能く知れり。御供して悲なく引き取らせ奉るべき由云ひたりしかば、御側に附き奉りしが、引き返して敵を追ひ退け、終に濱松の城に入らせ給ふ。鳥居彦右衛門元忠に御下知ありて、玄默口の御門を開きて、引き取る兵を入らせらる。たとへ敵慕ひ來るとも、我が籠る城に容易く討ち入るべきや。門を閉ぢずして篝火を所々に焚くべしと仰せらる。此日は天曇り雪散りて、寒氣殊に甚だし。御供して馬より下り立ち、城中に入る人々は、松平八郎三郎康定、松平彌九郎景忠、平岩七之助親吉、大久保忠隣、菅沼定吉、都築惣左衛門秀綱等なり、都築が妻粥を持たせ來りて、御供の人々に配り與ふ。後に衣服を賜りて賞美あり。

今日敵の跡を踏んで戰はゞ勝つべきに、味方早り過ぎて、心ならず敗軍しぬ。口惜き事なりと仰せあり。湯漬飯を、侍女久野奉りければ、三度替へ給ひ、我れ疲れたりとて、御枕をかたぶけられ、鼾かきて御睡あり。山縣城近く攻め寄せ。門の扉をたつるに、暇なしと覺えたり、如何に攻め入らばやと云ふを、馬場美濃守聞きて、討ち負けて引き取りたれば、門を閉ぢ、橋をも引くべきに、左はなくて、篝火白日の如し。もし謀あるべきか、輕々しく攻むべからず。徳川殿は海道一の弓取なり。よく見屆けてこそとて、猶豫しける處に、城中より鳥居彦右衛門、渡邊半藏、同半十郎、櫻井莊之助、勝屋甚五兵衛を始めとして、屈竟の剛の者ども百餘人突いて出でしかば、甲斐の兵、虎口を引き退きて攻めざりけり。

卷之三 終

卷之四

山崎長門守詫美越前守討死の事

天正元年、江北の軍に朝倉敗れしかば、信長の兵退ふ事急なり。朝倉が士大將山崎長門守、詫美越前守、柳瀨にて踏み止り、支へけるに勵まされて、返し合せて討死する者多し、山崎も大軍の中に駈け入て討たれけり。詫美矢立の硯取り出し、詩一首書きて落ち行く者に頼みて、故郷に返しけり。

萬恨千悲有レ憂然。
故園更莫レ灑二愁涙一。
誰識今夜入二黄泉一。
屍暴二戰場一唯是天。

かくて散々に戰ひて討死しける。其間に義景遁れ得て、越府に引き取れり。

中川重秀和田惟政を擊つ事

天正元年、將軍義昭織田信長と不和の事出で來て、和田伊賀守惟政將軍の味方して、攝津の國に陣す。信長和田を始めとして、誰某が首取りたらん者には云々賞すべしと、書き記して札を立てられたり。中川瀨兵衞重秀、此時は荒木村重に屬したりけるが、此札を打ち見、筆取りて、和田が名に點をかけ、自ら姓名を記し、家に歸り、妻に向ひ、事の由を語りて、萬一生きて歸りなば、又こそ見參すべけれと云ひしに、妻聊か患ふる色なく、さらば軍の門出祝ひ給へとて、羹すゝめ、酒取り出したり。其夜子の刻ばかりに、伊賀守が首取つて來りけり。村重大に驚き、如何で斯く容易う、和田をば討ち得たるぞと云ふ。重秀さん候、明日必ず戰ひを決すべし、されば討たるゝ者少かるべからず、同じく死なん命を、此夜の中に捨てなんには、和田が首取り得つべし、敵も明日の

合戰を大事に思ひ、淀河の淺深を踏み見んに、惟政さる大將なり。物見を賴むべからず、自ら來らんは必定なり、天晴討ち取らんずものを、もし又討死せば多くの敵の中に入りて、大將の首取らんとて、討死したりと人いはんは、武名は朽ちじと思ひ定め、水を渡り、彼方の岸の柳陰に、伏し隱れて待つ。案の如く、和田二陣に控へて、出で來るを紛れ入り、終に擊ち取りて、水中に飛び入り、遁れ得て歸りぬと申しければ、人々感じ合へる事大方ならず。

梶川彌三郎槇島先陣の事

天正元年、信長靈陽院殿を、宇治の槇島の城に攻むる時、折しも雨降りて、川水岸を浸せり。信長馬を水涯に駐めて、昔の梶原佐々木も、鬼神にてはよもあらじ、と云はるゝ處に、武者一騎、川へ打ち入りたるを見て、梶川彌三郎高盛なるべし、梶川討たすな、渉せと下知して、それより我れ先にと打ち入りて

渉しけり。此戰の前に、信長黑の馬を、梶川に與へらる。其時信長、梶川が志、重れての軍に眞先駈けんずる者なり、と嘲笑ひて云はれしが、果して其詞に違はざりけり。

山内一豐馬を買はれし事

山内土佐守一豐、其初め織田家に仕へたりけり。東國第一の駿馬なりとて、安土に牽き來て、商ふ者あり。織田家の士、是れを見るに、誠に無雙の駿足なれど、價餘りに貴しとて、求むべき人なく、徒に牽きて歸らんとす。一豐其比は猪右衛門と云ひしが、此馬望みに堪へかねたれども、如何にも叶ふべからざれば、家に歸り、身貧しき程口惜しき事はなし。一豐奉公の初めに、天晴斯かる馬に乘りて、家形の前に、打ち出づべきものをと、獨言しければ、妻つくづくと聞きて、其價はいかばかりにてか候ふかと問ふ。黃金十兩とこそ云ひ

つれと答ふ。妻聞きて、左程に思ひ給はんには、其馬求め給へ、其料をば進らすべしとて、鏡の奩の底より取り出して、一豐が前にさし置きたり。一豐大きに驚き、此年頃身貧しくて、苦しき事のみ多かりしに、此金ありとも知らせ給はず、心强くも包み給ひけん、今此馬得べしとは、思ひも寄らざりきと、且は悦び且は恨む。妻仰せの旨道理にてこそ候へ。さりながら、これは妾此御家に參りし時、父此鏡の下に入れ給ひて、あなかしこ、世の常の事に、ゆめ〳〵用ふべからず。汝が夫の、一大事とあらん時に進らせよ、と戒め給ひ候ひき。されば、家の貧しきも、世の常なれば、堪へ忍びても過ぎぬべし。誠に今度京にて、馬揃あるべしと承れば、此事天下の見物なり。君も又仕への始めなり。よい馬召して、見參せさせ申さんと、存じ候うてこそ奉れといふ。一豐悦ぶ事限りなく、頓て其馬求めてけり。程なく京にて、馬揃ありし時、打ち乘りて出でしかば、信長大に驚き、天晴馬やとて、事の由を聞き給ひ、東國第一の馬

遙に我が方に牽きて來りしを、空しく歸さんは、口惜しき事ぞとよ。それに年比、山内は久しく浪人して有りしと聞く。家も貧しからんに、求め得たるは、信長が家の恥を雪ぎたる上、弓箭取る身の嗜み。是れに過ぎたる事やあると感じて、是れより次第に用ひられしとぞ。

奥平貞能父子歸降の事

天正元年、三河作手筑手の城主、奥平監物貞勝入道道文、其子美作守貞義、孫九八郎信昌、皆勇氣逞ましき人にてありしに、近頃道文は、武田家に心を寄せ、勝頼の士大將甘利を、作手の本丸に置き、奥平父子は外廓にあり。信昌信玄の死したる事を、隱せるを悟り居し處に、東照宮より本多豐後守廣孝を以て、歸降の事を勸め給ふ。信昌父と大父とに勸めて、密約をなす。武田家奥平に人質を出せよ、と下知せらる。貞能如何にもすべき謀なくて、庶子千

丸十三歳になりけるを、黒屋甚九郎を添へて出しけり。東照宮を不意に襲ひ打つべき謀を、家臣を以て告げ奉る。武田にも是れを怪しみ、土屋右衛門直村黒瀬にありけるが、使を以て貞能を呼び寄せ、勝頼の撿使城所道壽も出向ひ、二心ある由聞ゆる處に、疾くも來られけるよ、神妙にこそと詞をかくる。貞能かゝる時には、父子の間も疑ひ思ふ事世の習ひなり。然れども愛子にて候ふ千丸を、人質に出し候へば、何の子細のあるべきやと、駭く色なければ、いざ碁を打たんと云ふ。貞能心靜かに碁を打ち終り、暇乞ひして門外に出るを、道壽又呼び戻し、湯漬飯を出す。貞能これを食する隙に、道壽士を門外に出し、待ち居たる貞能が士に向ひて、主人叛逆露はれ、唯今討たれし由を云はせけれども、奥平六兵衛打ち笑ひて、更に驚く色なし。これは、貞能素より武田方にて、如何なる事をいふとも、吾が首を見ざる中は、驚く事なかれと、固く云ひ含めし故なりけり。斯く謀りすまして、貞能馳せ歸り、其夜一族打ち具し

て退散し、岩崎に赴きければ、松平主殿助伊忠、本多豊後守廣孝等、東照宮の仰せを奉り、出で迎ひて瀧山に引き取りけり。

東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事

天正二年四月、東照宮天野宮内左衛門景貫が、大井の城を攻めさせ給ふ時、霖雨にて兵粮運送の便よからず、三倉の砦に引きとらせ給ふ處を、天野討つて出でつけしたふ。高山光明の城々よりも出會ひ、田野大窪の郷民も相加はり、此處彼處より鐵砲を打ちかけ、聲をあげて攻め懸かる。後殿の人々、數多討たれしを知し召さず。東照宮三倉にて聞し召し、引き返させ給へば、早や敵引き取りたり。玉井善太郎後殿しけるが、股を鐵炮にて打たせ、御後を慕ひて、三倉に參りければ、手負ひたるか、後に鐵炮の音せしを、怪しく思ひしに、軍ありけるよ、此馬に乘れと仰せられ、御馬より下りさせ給ひけり。人々君の士を勞

らせ給ふに感ぜざる者なし。大久保七郎右衛門忠世が同心杉浦久藏、(一説惣左衛門久勝に作る)深手負ひたりしに、七郎右衛門馬より飛び下り、是れに乘りて引き退けといふ。久藏うつけたる馬の下り所かな。我が如き者は、如何ばかり討たれたり共、何事かあらん。大將たる人の馬離れする物かは。八幡も照覽あれ乘るまじいと云へば。七郎右衛門禮儀も所によるぞ。疾く〳〵と云へば、久藏我れ此馬に乘りて生き、大將を捨て殺しては如何せんとて乘らざれば、七郎右衛門いな〳〵ならば、馬を棄つるよと云ひ捨てゝ、引かんとする處に、小玉甚内(一説石上兎角)馳せ來り、七郎右衛門は早退きたるぞと云ひて、久藏を引き立て馬に打ち乘せ、やがて七郎右衛門に走り附きたり。七郎右衛門には兵藤彌惣と犬わかといふ小者と、三人打ち連れて、細道の崖を引き退きし處に跡より退き來る者、七郎右衛門を突き落す。二人も續いて飛びける所に、犬わか揚羽の蝶の指物を持ちたるを投げ棄てたるを、敵見て、これを取らんとする

所を、彌惣走りかゝり、拐り取らんとすれば、敵彌惣を一刀切りたりけるに、七郎右衛門とつて返して、敵三人討ち取つたり。東照宮剛將の下に弱兵なしと忠世を御賞美ありけり。

渡邊守綱を槍半藏といふ事

東照宮と武田の兵と、大天龍にての戦に、近藤傳次郎手負ひて、渡邊半藏守綱を見懸け、手負ひたるぞ、連れて退けよと云ふ。心得たりとて、手に提げたる首を投げ捨てゝ、傳次郎を肩に掛け、三里餘り引き退きて援けければ、東照宮聞し召し、味方一騎討たるれば、敵千騎の强みといふ事あり。味方を援けたるは、七度の槍を合せたるよりも優れり。今より後、槍半藏と云ふべしと仰せあり。後に半藏、人に語りて曰く、傳次郎を我れなればこそ援けたれ。何として退け遂すべき。かゝる時は、大方援くる体に持て做し、刺し殺して棄てらるべし。味方なればとて、頼みにはならぬものよと云ひしなり。

又一說、永祿五年九月、參河の八幡にて、今川氏眞と三河の軍、戦ありて和あらず、二手に分かれて引き退く。敵急に迫つ懸くる。半藏守綱石川新九郎返し合せ、三度槍を合す。後には半藏一人、十度に及びて小返しして又三度槍を合す。矢田作十郎足を痛み引き退れたるを、半藏肩に引き懸けて退きけり。これより槍半藏と人に云はれしと云へり。半藏弟を半十郎政綱といふ。後新五左衛門といふ。味方原の軍に、草鞋の緒の解けたるを、下に居て結びけるを、半藏急げども、心靜かに結びて引き取れり。兄の半藏、聞ゆる剛の者なるが、半十郎が如き强情き者は、遂に見ずと、常に語りけるとぞ。

謙信單騎佐野城に入られし事

天正二年、北條氏政三萬の兵をもて、佐野政綱を圍まるゝと聞きて、謙信八千ばかりの兵を率ゐ、後詰めせられけり。城危しと聞ねければ、謙信後卷は我れに劣らぬ士大將數多あれば心安し。佐野の城こそ覺束なけれ。先づ我れは城に駈け入りて、力を添へなんとて、物の具も着ず、黑き木綿の胴服を打ち被り、十文字の槍を横たへ、僅に十三騎引き具し、氏政の陣の前を、馬を靜に歩ませ、佐野の城に入りたるを、氏政の軍兵見て、夜叉羅刹とは是れなるべしとて、恐れて近附く者もなし。氏政圍を解いて引き退くを、謙信やがて門を開かせ給へども、氏政一軍もせで引き退きける。

大河内政房節義の事

天正三年八、勝頼高天神の城を圍まんと師を出す。小笠原與八郎長忠、軍の目付大河内源三郎政房と相議して防ぎけり。東照宮後詰を信長に乞はせ給ふ。

勝頼城の巽の嶺に陣じ、大文字の旗を、中村の内公文といふ所に立つる。後まで其地を大旗と稱す。兵粮竭き士卒疲るれば、後卷を待ち兼れ、姉川の戰功を捨てさせ給ふと怒りて、七月二日城を出て降參す。軍の目付大河内政房は、應政公の妾、華陽院の甥なり。勝頼に降らざりしかば、小笠原生捕りて、石の牢に入れ置きたり。勝頼降らば、本領に倍して、宛て行ふべしと說かせけれども、志を變ぜず。勝頼怒つて牢の口を鎖す。政房今年より高天神落城に及ぶまで、八年の間牢中にあり。甲斐の士横田甚五郎、高天神に來て在番せしが大河内が節義を深く感じ、殊に懇に勞りたり。かくて東照宮、高天神を攻めさせ給ひて、天正九年三月廿二日の夜、城の守將岡部丹後眞幸、横田甚五郎尹松、相木市兵衞昌朝已下切つて出で、岡部は討死し、横田相木は切り拔けて、甲府に落ち行きけり。城落ちければ、石川伯耆守數正城に入りて、政房を搜し出す。牢中に年久しくありて、足痿えければ、莚に乘せて、東照宮の御前に出す。多

年石の牢に有りし艱厄云ふべからずとて、御涙を流され、御手づから、刀脇差黄金を與へらるゝに、政房生捕られし事を、口惜しく思へる色現はれしかば、人々敵の俘虜となる事は、小笠原が不義にして、武田に降參せし故なれば、何方に遁れ出づべきや。志は比類あるまじき事なれば、生捕りとなりぬる事、なか〳〵譽となりたりと、口々に云ひけるが、猶も其心に憤りけん。剃髪して肖空と稱せしが、仰せによりて、尾張の津島の湯に浴し、足の瘻も癒えければ、遠州稗原の地を賜りしが、長久手の戰に討死しけるとぞ。

鳥居強右衛門忠節の事

天正三年、勝頼、奥平九八郎信昌が三州長篠の城を圍み攻む。東照宮援兵を織田家に乞はせ給ひ、後卷の謀を廻らし給ふ處に、城中粮米、既に盡きんとせしかば、此旨を告げ奉らんため、鳥居強右衛門勝商に命じて、密に城を出だ

す。鳥居遁れ出づる事を得ば、向のかんほうが嶺に烟を揚ぐべし。三日過ぎて又彼の山に烟を兩度揚げなば、後卷なしと知り給ふべし。三度揚げなば後卷ある事を知り給へと約しければ、信昌鈴木金七郎を鳥居に添へて、五月十四日の夜、城の西なる山の岩根を傳ひ川に入る。奇手もとより大野川瀧川の水底に繩を張りて、鳴子を懸けたれば通るべきやうもなし。二人水練の達者にて、川の淺瀬は能く知りつ。小脇指を抽きて、川底を潜り、繩を切つて通りしかば、から〳〵と鳴りけるを、番の兵ども怪しみけるに、其中に一人、五月雨には斯る川をば鱸の通るならんといひければ、さて止みぬ。二人は早瀧の下廣瀬といふ處に上り、かんほうが嶺にて烟を揚げ、十五日に岡崎に參りて、云々の由を申す處に、信長其日、岡崎に着陣せらる。鳥居は、信昌尚心もとなくや候らん。忍び得て、城に入る事を得ば、早後卷候ふべき事、瘠に申さんとて引き返す。鈴木は、信昌が父美作守貞能に告ぐべしと、鳥居に別れけり。鳥居かんほ

うが嶺に上り、相圖の烟三度揚げて後、篠原といふ所に行き、忍び入らばやとするに、柵重々にふりて砂を撒き、出入の人の足跡を改めしかば、中々入るべき様なくて躊躇ひけるを、穴山の手の者見付けて怪しみて遂に搦められけり、勝頼逍遙軒信綱を以て、仔細を問はるゝに、鳥居事の由を、ありのまゝに答へしかば、勝頼鳥居を呼びて、汝が命を援くべし。汝城際に往きて、信長は上方の軍にて此城の後卷思ひも寄らずと云はゞ、城兵降參すべし。さらば、汝に厚く賞せんと云はれしかば、鳥居則ち心得候ふとて、城門近く至り、後卷として、信長父子岡崎まで、昨日旗を出され、先陣は一の宮に陣せり。徳川殿御父子、野田まで御馬を出されたり。此城運を開かん事、掌の内にありと云ひければ、甲州の者ども大に驚き、鳥居を引き連て、勝頼に斯くと申せば、大に怒りて、城に向つて、磔にして殺されけり。長篠にて、勝頼敗北して後、信長を始め、鳥居が無双の忠なる事を感じ、作手の甘泉寺に懇に葬られけり。

酒井忠次鴟巣城を乘取られし事

勝頼長篠の城を、圍み攻むる事甚だ激しかりしに、信長東照宮と共に後卷あり。軍評定の時、酒井忠次進み出で、今夜脇道より、長篠の附城鴟巣へ押し寄せ、攻め破らば、勝頼必ず敗北すべし、と申しもあへぬに、信長嘲笑ひ、汝は三河遠江の小競合には慣れつれど、大軍の計策は知らざりけり、と嘲られしかば、忠次云ふべき詞なくて、出でける處に、信長東照宮にさゝやき申されけるは、左衛門尉が申す處尤も然るべし、又呼び出されよとて、酒井が側近く居寄り、誠に由々しくも計りたる哉。されども、外に洩れ聞えんかと思ひて、わざと僞りて誹りたりき。疾く馳せ向つて、鴟巣を攻め破り候へ、といはれしかば、忠次承りて、出でんとする時、又引き留め、同じくは信長が向ひたき所なり、あたら武功を汝に讓りき、と申されける。忠次大に勇みて、夜半ばかりに

思ひも寄らぬ所に押し寄せて、武田兵庫頭信實、三枝勘解由、和田兵部を初めとして、數多討ち取り、火をかけたる煙を、武田の軍兵顧みて、大に勇氣抽けて、終に敗北の原因となりけるとなり。此夜討に、天野惣次郎は指物を插さず戸田半平は道遠し、夜明くる事もあらんとて、指物を持たせけるが、城を燒きたる火の光、白日の如く、天野戸田先を爭ひけるに、戸田が銀の鬮懷の指物輝き渡りて、人の目を驚かしけり。信長後に、酒井が功を賞して、汝は前に眼あるのみにもあらず、後にも眼あり、と云はれしかば、忠次忝き由申して、さて、終に後を見たる事はなく候ふ、と申しければ、信長笑ひて、前後の計違はざる事を賞せんとて、云ひ過ぎたりと云はれければ、忠次此時、仰せの旨面目ありとて、退出したりけり。

長篠合戰の事

長篠にて、信長の先陣と旗本との間に、堀切を構へ、柵の木結ひて、掛きて敗北すれば、武田の猛兵、敵は逃ぐると云うて追ひ來り、柵の木に行き滯みたる處を、數千の鐵砲、雨の降るが如く打ち掛くれば、空矢なく中りて、討たるゝ者數を知らず。引き退かんとすれば、柵より出でゝ付け慕ふ。戰を挑めば、柵の中に入りて打ち白ます。勝頼の士大將、勇氣餘りありといへども、打ち破るべき樣なく、皆的になりて討死しけり。

内藤四郎左衛門返答の事

同じ時、德川家の先陣を下知せよとて、信長の使來る。内藤四郎左衛門、我れ等が主君は、先陣の下知を、他人に受くる者には候はず。内藤承りて、返答仕りたりと申されよ、と荒らゝかに云ひて追つ返す。信長聞いて、德川家よき士數を知らずと云はれけり。

内藤が島井に作れるあり。然れども、島井は三形が原にて討死したれば、内藤の事なるべし。

多田久藏が事

同じ軍に、甲斐の士一人生捕りて、信長の前に引き來る。裸に緋曇子の下帶をしたり。信長名を問はるゝに、美濃の者多田久藏と名乘る。信長手を拍ちて、汝は伯父の葬禮の時、火車を斬りたりと聞けり。美濃尾張は、我れに親しみある國なり。我れに奉公せうとや思ふ。縛りたる繩を免せ。惡源太も搦められたり。弓箭とる躬の恥ならず、と云はれしかば、長谷川藤五郎傍に引き退け、繩を解けば、多田側なる槍を奪ひ取り、四五人突き伏する。長谷川其處にて首を切りて、信長に出し、しかぐなりと云へば、信長深く惜しまれけり。

一說、赤地の唐織の錦の下帶したる士を、生捕り來る。唯者にあらじ、名乘れといへども、名乘らず。さらば雜人の手にかけて殺さん。士ならば、腹切らせんと云ひしかば、多田淡路が子なりといふ。信長聞きて、淡路に久藏新藏とて、二人の子ありと聞く。孰れぞと問はるゝに、新藏なりと申す。勇士なり、援けてこそとありければ、生捕りとなりたる恥辱、疾く首を刎れらるべしと乞ひたり。信長の前にて繩を解きしに、門外に立て懸けたる槍を取り、周圍の者を突き殺すによりて、遂に新藏を切り殺しけり。

佐久間信盛僞りて勝頼に降る事

長篠合戰の前、信長謀を廻らし、佐久間信盛より、潛かに長坂釣閑が許に使を遣し、日比信長に恨むる子細あり。願はくば、勝頼軍をすゝめ、戰あらんには、其時信盛裏切りして、信長の旗本へ俄に切りかゝるべき旨を、いひ送りしかば、釣閑悅んで、これを謀るとは知らず。勝頼に一戰を勸めける故

馬場美濃守信勝を始めとして、侍大將の軍評定していひける事共を、勝頼悉く用ひずして、楯なしを誓つて進んで軍すべきと決斷せられしかば、其後は、諸大將諫むる事を得ざりけるとなり。

二股城攻め内藤櫻井功名の事

天正三年六月、東照宮二股の城を攻め給ふ。城主は依田下野守幸成なり。其子右衛門大夫幸致城を出でゝ、鳥羽山の下なる小川を隔てゝ、防ぎ戦ふ。内藤彌次右衛門家長强弓の手利にて、散々に射白ます。松平彌右衛門忠長が子彦九郎、敵に朱のてうちんの指物あるを見て、味方にも此指物ありければ、誤りて敵の中へ紛れ入りしを、朝比奈彌兵衛一箭にて射伏せたり。内藤は彦九郎と緣者の親みあれば、引き返して彌兵衛を射る、其箭彌兵衛が乘りたる馬の鞍の前輪より、後輪をかけて射貫く、彌兵衛が弟彌藏馳せ來りて、兄が屍をひき

退けんとするを、二の矢にて是れも射倒したり。城兵二人の屍を引き退けんとするを、本多忠勝等進みかゝりて追つ立てたり。城兵引き退く中に、一人手負ひて、退き兼れたる者ありけるを、一人とつて返し、是れを投げ、門内に引き入れけるを、櫻井莊之介勝次、敵の首を一つ取りたりしが、又進んで追つ駈け行く。東照宮御覽ぜられ、茜の四半の指物は、櫻井なるべし。深入りするよと仰せられけり。其時敵の手負を助くる者、漸う一の木戸、揚錠門の中に入り手負ひたる者は、未だ半見ゆる處に、勝次走り附き、手負ひたる者の足を取りて、三間ばかり引き出し、遂に其首を取る。其時門内より、勝次が指物を打折りけるが、屍に掛かり留りしを知らずして、五六間ばかり引き取る時、從者斯くと云へば、又取つて返し、指物を取り得て、鳥羽山に歸り、首を奉る。東照宮唯今の勇氣いかめしさ、誠に無双と覺ゆるなり。然れども、是れより後は、努々今日の如く、深働きすべからずとて、遠州にて祿を增し賜りけり。彼の從者も

度々働きありて後、士となし、内田彦右衛門と云ひけり。

芦田信蕃二股城を退く事

勝頼、長篠敗北の後、芦田常陸介信蕃二股の城を守る。三河の軍、五月下旬より此れを攻む。南方の山に、東照宮御陣を据ふられ、巽の方鳥羽山、東は安倉口の山、北は三十原口の山、西は和田島に向ひ城を構へらる。信蕃固く守りて、十一月に至りて。城を渡し甲州に引き入るべしと。勝頼より再三下知せらるれども聞き入れず。勝頼自筆の書をもて、下知せられしかば、十二月下旬に人質を出し、廿三日に城を渡さんと約せしが、雨降りければ、蓑笠にて見苦しく候ふとて、翌廿六日、天晴れて後城を渡し、二股の川の邊にて、人質を取り換へ引き取れり。信蕃小勢にて久しく守り、且城を渡す作法正しかりけるを、御感ありて後終に徳川家に仕へけり。

信長公秋山伯耆を刑し給ふ事

天正三年、信長美濃岩村の城を攻めて、秋山伯耆晴近を生捕り、生きながら逆磔といふ物にせられけり。此れは信長の姑、遠山内藏助が妻にて、遠山は其前岩村にありけるを、秋山遠山の七家と稱せし人々と、和平して謀り、元龜二年信長の加勢の士、三十五騎を殺害し、城を奪ひ取りて、内藏助が後室をこが妻としけり。遠山は是れより前に病死し、其嗣信長の男、御坊丸を甲州へ送りやり、岩村を居城とせしかば、信長怒り憎まるゝ事深くて、斯くはせられしなり。秋山口惜しくも計られけるかな。我れは、信長と緣類の親みあり。斯くせらるゝ事、無念なりとて齒を嚙み、信長の末を見よと罵りて、七八日ばかりありて死しけり。信長信州法華寺にて、兵粮をつかはれける時、いろ〳〵の小袖を着たる女房一人來り、懐より、錦の袋に入れたる茶入を取り出し、

是れを信長に見せ賜り候へ。見知りておはしまさんと云ふ。信長走り出て、茶入をば石に當て、打ち碎き、刀を抽いて、彼の女房を切り殺されけり。此れ秋山が妻にて、信長のをばなり。

松平忠次諏訪原城を守らるゝ事

天正三年八月、東照宮諏訪原の城を攻めさせ給ふ。此城は、甲州馬場美濃守氏勝が城制の法にて築きたりし名高き城なりといへども、城兵力弱りて、廿四日の夜城を棄てゝ、小山の城に逃げ落ちける。東照宮、此地は高天神に往來の要路、駿州田中持船の敵と、大井川一筋を隔てたり。勝頼必ず隙を伺ふべし。誰か此にありて、城を守り敵を防ぐべき、と仰せありけるに、松平左近忠次進み出で、身不肖に候へども、此城を守り申すべしと申しける。御感ありて、松平の姓を賜り、御諱の字を下され、松平周防守康親と申せしは、此時よりの事

なり。勝頼が暴惡、殷の紂王に似たり。これより攻め入りて、打ち滅すべきとて、諏訪の原の城を、牧野の城と改められしとなり。

山内治太夫進士清三郎功を讓る事

諏訪の原の城を、甲州より攻め來りて合戰あり。松平康重(康親の子)の士山内治大夫、進士清三郎、山崎惣左衛門、三人殿しけるに、山内は精兵の手利にて、射拂ひて引き退く時、矢だれ盡きたり。山縣源四郎猶追つかくる時、進士清三郎矢一筋を山内に投げ遣りしかば、山内踏み止りて射けるに、志村金右衛門が胸板を射通し、後の松の木に射附けたり。それより物別れす。山縣此矢を康重に送り返して、強弓精兵無雙なりとぞ賞めたりける。康重、其矢に進士が姓名の彫付けたりしを見て、賞する處に、是れは山内が射申したるにて候ふと申す。復山内を呼び出して、云々なりやと聞かるゝに、清三郎が射たる

にて候ふと讓りけり。康重兩人に感狀を與へたり。世の人、兩人を今の孟子反と云ひ合へり。

長九郎左衛門能登國發向の事

天正五年、畠山修理大夫義隆毒殺せられ、家臣七尾の城に據りて信長に屬し、能登大に亂れければ、義隆の伯父上杉彌五郎義春、越後に在りて是れを聞き、謙信に斯くと告ぐ。謙信即ち師を出して、義春先陣して、七尾の城を攻め落す。此時長九郎左衛門重連、七尾にて畠山が長臣溫井三宅に殺さる。重連が弟恩光寺使僧となりて、信長に此由を申せば、柴田勝家、丹羽長秀、前田利家、羽柴秀吉、瀧川一益、氏家卜全等、四萬ばかりにて打ち立ち、八月五日加州手とり川を渉り、永島に陣取りたり。謙信は能登一州悉く旗下につけ、八月朔日兵を返して、加州にて長が一族の首七つ、倉部柏野の間なる濱に、結

ひ渡し懸け並べ、札を書きて立てられたり。松任の城主蕪木右衛門大夫と和平し、信長肴陣を聞き、松任にて軍評定し、一戰すべしと手配りあり。七尾既に落ちて、謙信これまで打向はれたり。爰にて合戰無益なりとて、引き退くべしと、信長の陣々色めき立つ。恩光寺人に首を見するに、名のみにて面貌異なり。上方の軍の押し來るを聞き、謀を以て、長一族の首を僞り設けたるならん。能州を棄て、松任に在るは、後詰を防がん爲なるべし、といふを聞きて騷ぎも靜まりけり。即夜戌の刻に及んで、恩光寺柴田木下が陣に行き、先には味方一同に、敗北すべき色あるを見て、謀りて申せしなり。七つの首は、吾が父兄弟にて候ふと告げ知らせしかば、爰にて合戰すべからずとて、信長引き返さる。恩光寺是非一軍と乞へども、聞き入れず。恩光寺は、後信長の命にて還俗し、長九郎左衛門連龍と云ひしは、此人なり。連龍父兄の吊合戰を志し、信長の下知を請け、越前に至りて、柴田に賴みけり。勝家越前の大橋に札を立

て、長九郎左衛門能州に發向す。立身を志す輩は、我が被官たりとも參るべし、と書きたりければ、相集まる士八十餘人、天正七年三月二日、能州穴水の城に入り、舊好の者共馳せ集まり、百人に及べり。上杉より、有坂備中を七尾に置きけるが、長曾檢見與十郎を大將として、押し寄せ戰ふに、長敗北して危かりしを、谷大學討死し、長漸やく引き取りたり。紀州士鈴木因幡、初め長に親みあり、北越に居て、今能州に來り、長有坂を和平し、從者は陸、長は船にて有坂が方に來るべしとの使に、鈴木來りしに、長を殺害すべき色あり。長に從へる石黒大膳、井久留了意、合田民部、木島小介如何すべきといふ。石黒今七尾に行かば、必ず害に遭はん。船中にて鈴木を殺して退くべしと勸む。長聞きて、汝が志悅ぶべし。然れども、陸より回る家人皆殺されなん。吾獨生くべき義なしとて、七尾に行き、法道寺に入りて、遂に有坂に對面す。殺害にきはめたれども、有坂事故なく、長を歸しけり。松川兵部今日長を討ちもらし

殘り多く候、押し寄せて討たんといへども、有坂聞き入れず。長は石動山にかかり、越中に赴く。石黒敵寄せ來らんに、殘る者なくば口惜しきなり。姓名を賜り候へ。敵を支へて討死せんといへども、長汝を棄て殺し、吾れ獨生きて何の面目あらんと云ふ。石黒言ひ甲斐なき事を承るものかな。本意を遂げられなば、吾が子孫を取り立て給はれと云ふ處に、七尾の商來りて、敵押し寄すると云ふ。長は石動山にかゝり、石黒は物の具して待てども、敵來らざれば、後より乘り付けて、共に越中に赴き、神保安藝守氏春の許に居たり。後長は前田の家に仕へて、淺井なはてに武功ありしは、此人なり。長後又恕庵と稱しけり。

越中にて謙信月を賞せられし事

謙信越中にて、秋夜諸將をあつめ、月を賞して詩あり。

霜滿テ軍營ニ秋氣淸シ、　數行過雁月三更、

越山並得能州景、　任他家郷念三遠征。

信長公松永彈正を恥ぢしめ給ひし事

東照宮信長に御對面の時、松永彈正久秀傍にあり。信長この老翁は世人の爲し難き事三つなしたる者なり。將軍を弑し奉り、又己が主君の三好を殺し、南都の大佛殿を焚きたる松永と申す者なり、と申されしに松永汗を流して赤面せり。

東照宮後長臣たちを召して御物語ありける時、此事を仰せ出され、先年信長、金崎を引き退きし時、所々に一揆起り、危かりしに、朽木が淺井と一味を疑ひ、進退極まりしに、松永信長に告げて、朽木が方へ參りて味方に引き付け候ふべし。朽木同心せば、人質を取りて、打ち具し御迎ひに參るべし。若し又歸り參らずば、事ならずして、朽木と刺しちがへて死したり、と知し召されよと云ひて、朽木が館に赴き、事なく人質を出させ、それより信長朽木谷にかゝりて、引返されしなりと、仰せられしとぞ。

山口六郎四郎奥田三河守高屋の城を落つる事

松永が士大將山口六郎四郎、奥田三河守、高屋の城を守りけるを、信長攻めらるゝに、城中力盡きて、一方を駈け破り、落ちんとせしに、山口風雨の夜鐵砲をあつめ、東の門の寄手へ向けて、散々に打たせければ、すはや打て出ると騒ぎけろ。其隙に西の門を開き、一同に駈け出で、撃ち破りて落ち行きたりけり。

長坂釣閑跡部大炊邪佞の事

謙信卒して、(天正六年三月九日)養子上杉三郎景虎、(改政虎實は北條氏康の子也)猶子喜平治景勝遺跡を爭ふ。景虎緣ある故、武田勝頼に援兵を頼む。勝